かみ　あり　よこ　ばたけ

神在横畠遺跡

福岡県前原市大字神在字横畠所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第71集

２０００

前原市教育委員会

a. 神在横畠遺跡１区全景（南から 後方は可也山）

b. 横畠古墳出土埴輪

序

本書は、平成８年度から９年度にかけて実施した住宅建設に伴い実施した神在横畠遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

前原市を中心とする糸島地方一帯は古代よりわが国と中国、朝鮮半島、大陸の人々との交流の拠点として栄えた地です。市内にはその繁栄をしのばせる古代遺跡が今も密に分布しており、国の史跡も５件を数える、まさに歴史遺産の宝庫です。

神在横畠遺跡も国史跡の釜塚古墳に近く、この地一帯も歴史上重要な地域であったことがわかります。

今回の発掘調査では新たに埴輪をもつ古墳が発見されました。埴輪出土古墳は当地方では11例目を数え、古墳時代における当地と大和の古代政権との密接な関係がしのばれる資料として貴重であり、意義深い成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、厳しい社会、経済情勢の最中、多方面にわたりご援助を賜りました九観住宅株式会社の関係各位に深く感謝する次第です。

平成12年３月31日
前原市教育委員会
教育長　坂本　勝喜

例　言

1．本書は、福岡県前原市大字神在字横畠430番地に所在する遺跡の発掘調査成果を記録した報告書である。

2．本遺跡の調査は前原市教育委員会が九州観光住宅株式会社からの委託を受け、平成８、９年度に実施した。

3．本書に使用した遺構実測図は１区を岡部裕俊・野田純子が、２区を野田が実測し、岡部が製図した。

4．本書に使用した遺物実測図のうち埴輪は野田が、他の土器は平尾和久（福岡大学・現前原市教育委員会）が主に作製し、釜塚古墳出土埴輪の実測は岸本圭氏（福岡県教育委員会文化財保護課）の手によるものである。製図は岡部が行なった。

5．本書に使用した、遺構写真は岡部、野田が撮影し、バルーン写真は㈲空中写真企画（代表 檀睦夫）の器材を使用した。

6．本書に使用した方位は磁北である。

7．発掘調査にあたっては藤森啓子、青木輝代、平山富士子、中峰幸枝、川上豊子、大塚房子、川上久美子、徳永美根子、川上ももえ、川上はるえ、高田とよみ、高田裕一、飯干孝子、後藤雅子、屋久江里子、谷山セツ子、有富つたえ、中田朋子、藤木和子、森山シゲミ、溝口ヨシノ、原口マツノ、米山八重子、竹原ひとみ、青木シゲ子が現地作業に従事した。
また、本書の作製にあたり、遺物整理、実測、写真の整理作業等では、川上辰子、山口敏子、島影やよい、豊舛美智子、友池真由美、斉藤有美（奈良大学）の協力を得た。

8．本書に使用した遺物写真の撮影はフォトハウスおか（代表　岡紀久夫）に委託したが、一部に岡部が撮影したものがある。

9．出土木柱の放射性炭素年代測定、及び樹種同定業務については（財）九州環境管理協会に委託した。

10．本遺跡の調査にかかる遺物、図面は伊都歴史資料館で管理、保管する予定である。

11．本書の執筆は３については（財）九州環境管理協会に、４－（１）については岸本圭氏に執筆いただき、他は岡部が担当した。編集は岡部、平尾と協議のうえ、野田が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに
1．調査にいたる経過 …… 1
2．調査の組織 …… 2
Ⅱ．調査の記録
1．位置と環境 …… 4
2．調査の内容 …… 9
（1）発掘調査での協議経過 …… 9
（2）調査地点の概要 …… 9
（3）１区の遺構、遺物 …… 11
竪穴住居 …… 11
掘立柱建物 …… 14
柵列 …… 14
溝 …… 16
（4）横畠古墳 …… 18
立地 …… 19
墳丘 …… 19
周溝 …… 19
出土遺物 …… 19
（5）２区の遺構、遺物 …… 26
掘立柱建物 …… 26
溝 …… 27
その他の遺構、遺物 …… 27
3．自然科学分析の記録
神在横畠遺跡出土遺物放射性炭素年代測定及び樹種同定業務報告 …… 32
4．糸島地方の埴輪資料補遺
（1）釜塚出土埴輪資料について …… 34
（2）糸島高校郷土博物館所蔵の釜塚出土埴輪片について …… 36
（3）志摩町井田原開古墳出土埴輪について …… 36
Ⅲ．まとめ …… 39

図　版　目　次

巻頭図版ａ　神在横畠遺跡１区全景（南から後方は可也山）
　　ｂ　横畠古墳出土埴輪
図版１　神在横畠遺跡周辺航空写真（1974年頃アジア建設コンサルタント撮影）
図版２－ａ　１区全景（直上から）
　　－ｂ　同　　上（北西から）
図版３－ａ　１区北東部近景（南西から）
　　－ｂ　１号住居全景（南西から）
図版４－ａ　１号住居カマド土器出土状況（南西から）
　　－ｂ　１号住居カマド燃焼部土層断面（東から）
図版５　１号住居遺物出土状況
図版６－ａ　２号住居全景（南西から）
　　－ｂ　２号住居完掘状況（南西から）
図版７－ａ　４号溝（南西から）
　　－ｂ　４号溝（南東から）
図版８－ａ　10号溝
　　－ｂ　10号溝遺物出土状況
図版９－ａ　８号溝（北西から）
　　－ｂ　８号溝土層断面（南東から）
図版10－ａ　９号溝
　　－ｂ　９号溝須恵器出土状況
図版11　２区全景（真上から）
図版12　横畠古墳検出状況（真上から）
図版13－ａ　周溝２区（北東から）
　　－ｂ　周溝２区埴輪出土状況（南から）
図版14－ａ　周溝３区（北北東から）
　　－ｂ　周溝３区埴輪出土状況（北から）
図版15－ａ　周溝３区埴輪出土状況（西から）
　　－ｂ　周溝３区土層断面（東から）
図版16－ａ　４，５号掘立柱建物（真上から）
　　－ｂ　４，５号掘立柱建物（北西から）
図版17－ａ　４号掘立柱建物柱穴２柱根出土状況
　　－ｂ　４号掘立柱建物柱穴９柱根出土状況
　　－ｃ　４号掘立柱建物柱穴　土層断面

図版18－ａ　Pit141土器出土状況
－ｂ　Pit162土器出土状況
－ｃ　Pit199底面石敷設状況
－ｄ　Pit197底面石敷設状況
図版19　出土遺物①（１号住居、溝）
図版20　出土遺物②（横畠古墳）
図版21　出土遺物③（横畠古墳）
図版22　出土遺物④（横畠古墳）
図版23　出土遺物⑤（横畠古墳）
図版24　出土遺物⑥（柱穴）
図版25　出土遺物⑦（柱穴）
図版26　出土遺物⑧（柱穴）

挿　図　目　次

第１図　神在横畠遺跡１区発掘調査風景 …… 1
第２図　神在横畠遺跡現地説明会資料解説図 …… 2
第３図　ＪＲ筑肥線の経路と神在横畠遺跡の位置（１／200,000） …… 3
第４図　調査地点周辺の地形と発掘調査地点（1985年現在・１／5,000） …… 3
第５図　長野川流域における主な遺跡の位置（１／50,000） …… 5
第６図　東若宮遺跡出土甕棺実測図（１／12） …… 6
第７図　宮地嶽に残る藩領の境界石 …… 7
第８図　調査地点全体図（１／300） …… 8
第９図　１区遺構配置図（１／100） …… 10
第10図　１号住居跡実測図（１／40） …… 11
第11図　１号住居跡カマド実測図（１／20） …… 12
第12図　１号住居跡出土遺物実測図（１／４、１／２） …… 12
第13図　２号住居跡実測図（１／40） …… 13
第14図　１区掘立柱建物実測図（１／60） …… 15
第15図　１号土壙実測図（１／20） …… 16
第16図　４号溝下層遺物出土状況実測図（１／40） …… 17
第17図　２区遺構配置図（１／200） …… 18
第18図　横畠古墳の推定墳丘規模（右上・１／200）と周溝埴輪出土状況実測図（左下・１／30） …… 20
第19図　周溝出土埴輪実測図①（１／６） …… 21
第20図　周溝出土埴輪実測図②（１／４） …… 22
第21図　周溝出土埴輪実測図③（１／４） …… 23

第22図　周溝出土埴輪実測図④（１／４）…… 24
第23図　２区掘立柱建物実測図（１／80）…… 26
第24図　神在横畠遺跡遺構出土土器実測図（１／４）…… 28
第25図　神在横畠遺跡包含層等他出土土器実測図（１／４）…… 29
第26図　４号建物柱根実測図（１／４）…… 33
第27図　釜塚古墳出土埴輪実測図（１／４）…… 35
第28図　井田原開古墳出土埴輪実測図（１／４）…… 37

表　目　次

第１表　横畠古墳埴輪観察表 …… 25
第２表　神在横畠遺跡出土土器観察表① …… 30
第３表　神在横畠遺跡出土土器観察表② …… 31
第４表　^{14}Ｃ年代測定、樹種同時定試料一覧表 …… 32
第５表　^{14}Ｃ年代測定結果 …… 32
第６表　糸島地方の埴輪出土古墳一覧 …… 39
報告書沙録 …… 40

Ⅰ．はじめに

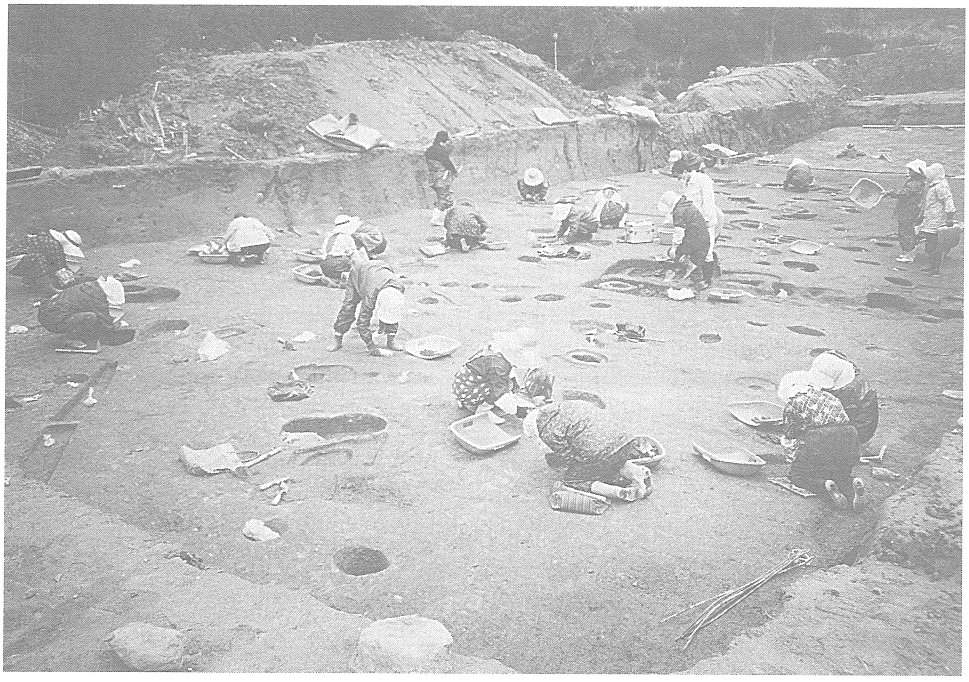
１．調査にいたる経過

前原市は福岡市の西に隣接し、近年、福岡都市圏のベッドタウンとして人口増加が著しい。とりわけＪＲ筑肥線が昭和58年に福岡市営地下鉄との相互乗り入れを開始し福岡市街地への電車での直接乗り入れが可能となるとその傾向に一段と拍車がかかり、人口はさらに増加の一途をたどった。平成２年には人口は５万人を突破。平成４年には単独で市制を施行するにいたった。平成12年３月現在で人口64000人ほどを数え、なお、増加する傾向にある。

人口の増加に呼応して、筑肥線の各駅周辺では、官民折り混ぜて新たな住宅団地や高層住宅の建設などが着々と進められている。加布里駅周辺も例外ではなく、駅の周囲はまたたく間に木造住宅を中心とする新興住宅街と変貌をとげていった。

今回の調査地点はＪＲ加布里駅の東200m、宮地嶽（標高118m）西裾の谷間の高所に位置する。駅に近いにもかかわらず、背後の宮地嶽が迫っているため緑も豊富なうえ、当該地から西には加布里湾を一望できる。自然、景観ともに恵まれた地である。

当地における周知の埋蔵文化財文化財包蔵地の発掘届が九観住宅株式会社から提出されたのは、平成７年12月のことであった。市教育委員会文化課では、開発計画地に近接して国史跡「釜塚」が所在し、届出地にも埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことを説明した上で、地内の試掘審査を行なったところ、敷地内の広い範囲において古墳～奈良時代の土器片とともに柱穴、土壙等を検出し、埋蔵文化財の包蔵を確認した。この結果に基づいて、文化財の保護について会社側と数度にわたる協議を行なったが、開発にあたっては事前の発掘調査の実施は避けられないとの判断に達した。



第１図　神在横畠遺跡１区発掘調査風景

その結果、平成９年２月３日には調査に関する全体協定書ならびに発掘調査委託契約書を締結して調査を開始し、同年12月24日に現地調査を終了した。

調査も後半にさしかかった７月下旬には、進入路地下から新たに古墳が発見され、周溝からは埴輪も出土し、新聞等により紹介された。

市民へ調査成果の公開を進める立場から、調査終盤の12月20日に現地説明会を計画したが（第２図）、当日は雨天に阻まれたため、急きょ現地ハウスでの出土品の展示公開に変更した。

２．調査の組織

本調査に係る組織は以下のとおりである。

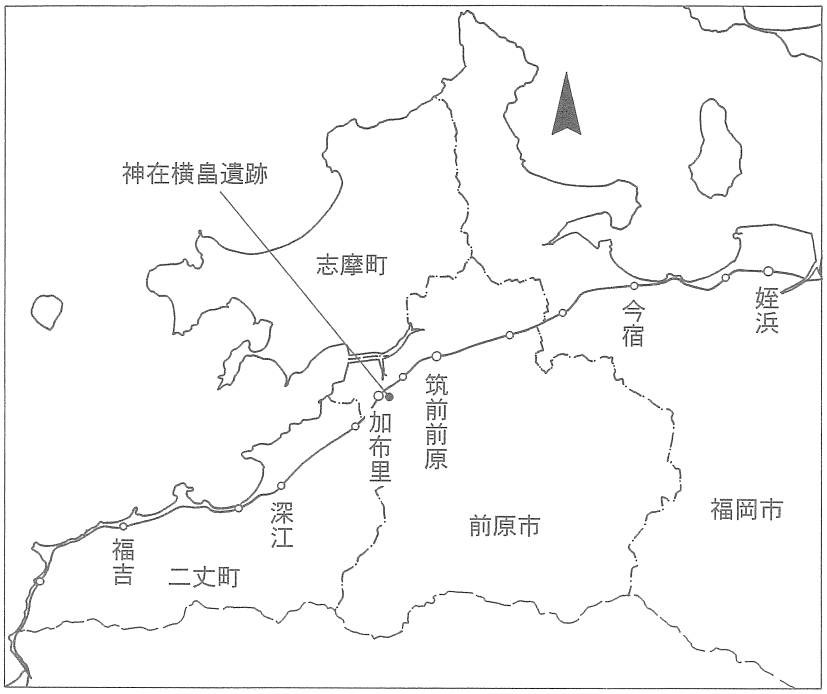
調査主体　前原市教育委員会

総　括	教育長	坂本　勝喜	（平成９年９月～平成11年度）
		樗木　昭生	（～平成９年８月）
	文化部長	有田　種之	（平成９～11年度）
		中原　直國	（平成８年度）
	文化課長	松井　昇	（平成11年度）
		吉村　耕治	（平成９、10年度）
		岡本　宗嗣	（平成８年度）
	文化財係長	林　　覚	（平成９～11年度）
		川村　博	（平成８年度）
庶　務	文化振興係長	藤井　正信	（平成11年度）
		宮本　洋子	（平成９、10年度）
	文化振興係	大西　将夫	（平成９～11年度）
調　査	文化財係	岡部　裕俊	（平成８年度、10～11年度）
		野田　純子	（平成９年度）

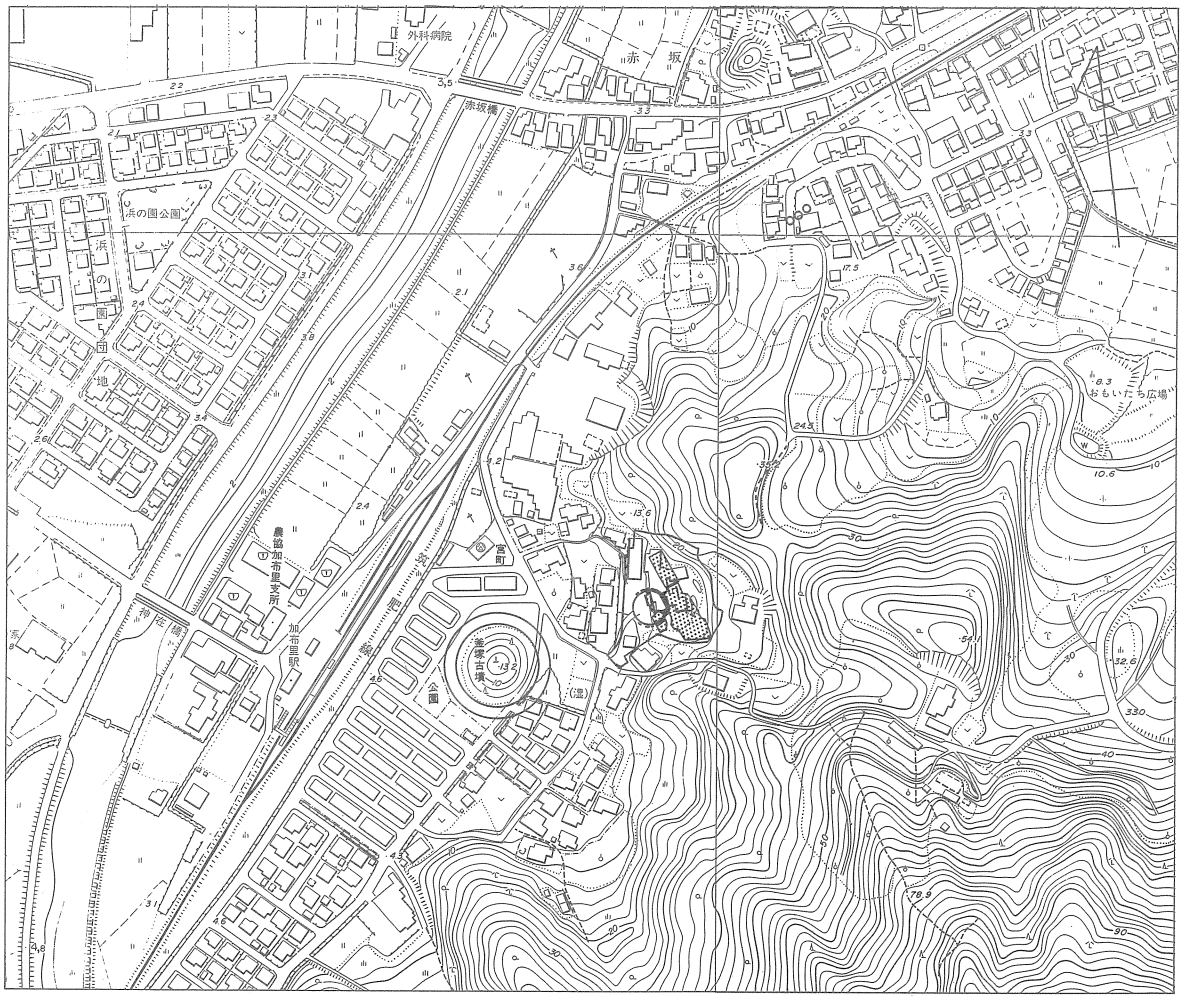
昔々、海はもっと内側に入り込んでいました。
神在横畠遺跡も海をすぐ近くに臨む場所に位置していたことになります。

第２図　神在横畠遺跡現地説明会資料解説図

なお、発掘調査、遺物整理及び報告書の作製にあたっては以下の方々からご指導、ご助言をいただいた。
記して感謝申し上げる次第である。
渡辺正気、古川秀幸、村上敦、津国豊、車崎正彦、池辺元明、中間研二、岸本圭、常松幹夫、井上義也



第３図　ＪＲ筑肥線の路線と神在横畠遺跡の位置



第４図　開発予定地周辺の地形と発掘調査地点（1／5,000）

Ⅱ．調査の記録

１．位置と環境

神在地区は前原市の北西端に位置する。その西は糸島郡二丈町に接している。背振山系の一峰、羽金山（900m）に源を発し、前原市の西部を北流する長野川の下流域に位置する。

江戸時代には神在村と呼び、唐津藩の所領地であった。当時の村名表記は「神有」と書いた。その地名の由来を筑前国続風土記にみれば、神功皇后が当地を通った時に紫雲が棚引く当地の景色をみて「この地には神がいる」と語ったことによると伝えられる。糸島地方に多くのこる神功皇后伝説の一つとして有名である。

神在地区を含む長野川流域の埋蔵文化財の様相は、近年行なわれた発掘調査などによって徐々に明らかになりつつある。

縄文時代の遺跡は上流域に多い。川付の宇美八幡境内遺跡や本石ケ崎遺跡からは早期の押型文土器や磨製石斧が採取されている。羽金山中腹、標高500mほどの緩斜面に位置するのは野呂高原遺跡である。露頭から縄文土器、石器が採取されたが、正式調査は行なわれていない。標高40m前後の段丘斜面に立地する長野宮ノ前遺跡では昭和62年に市教委が行なった発掘調査の際に縄文後期前半の方形竪穴、土壙、埋甕、集石など遺構とともに、縄文土器、石器が多数出土した。

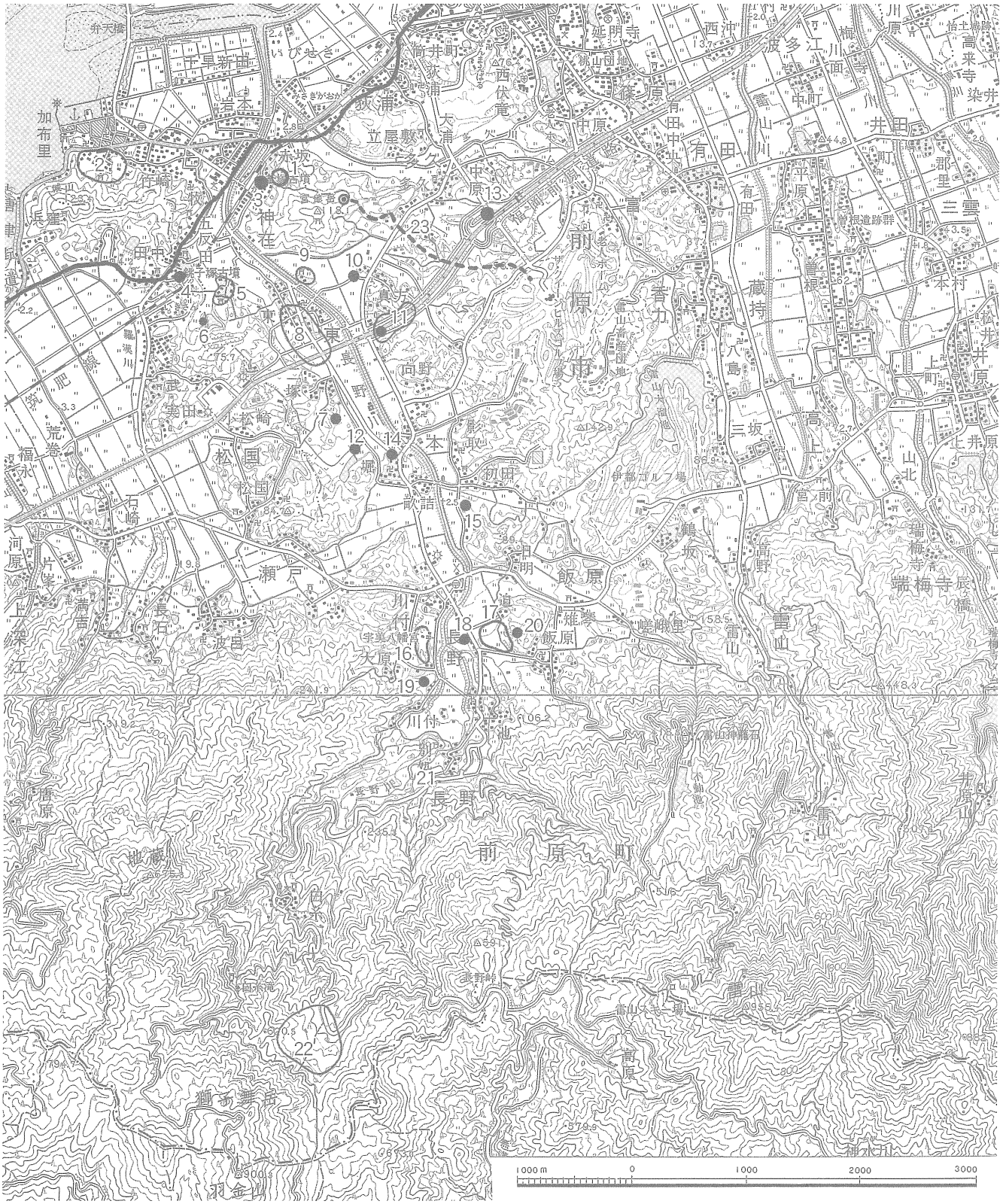
長野宮ノ前遺跡からは弥生時代早前期の39基の墳墓も発見された。そのうち少なくとも２基は支石墓で、周辺で発見された平石から最低でも５基の支石墓が築かれていた可能性がある。また、隣接する飯原門口遺跡では金海式甕棺墓も調査されている。一帯が長野川流域における弥生時代前半期の拠点集落であったと考えられる。

弥生時代中期末～古墳時代前半期では、飯原門口遺跡、本遺跡群、東高田遺跡、東遺跡群、東五反田遺跡、加布里遺跡群など集落が河川流域に広がりをみせる。

この時期の特徴として東地区周辺で弥生後期後半期の甕棺墓が数多く発見、調査されていることがあげられる。大神邦博の論文によって弥生時代後期の甕棺研究の先駆となった神在遺跡をはじめ東太田、二塚、五反田、若宮遺跡、本田孝田遺跡などがある。

東太田遺跡では丘陵上の集落からはやや離れた地点で４基の甕棺（うち３基は小児棺）と小型木棺墓によって構成された後期前半の家族墓的な墳墓群が出土し、唯一の成人棺は大型広口壺の口縁を打ち欠いて呑口状に合わせたものであった。東二塚遺跡の甕棺墓では、棺内から大量の水銀朱とともにガラス丸玉、管玉、２個のガラス釧などが出土している。長らく研究者の記憶の片隅に追いやられた存在であったが、平成10年に京都府の大風呂南遺跡でガラス製釧が出土したことにより改めて注目を集めることとなった。また、東五反田遺跡では終末期の甕棺を主体とする方形周溝墓が出土した。

丘陵先端部で造成中に偶然発見された東若宮甕棺墓の下棺は底部は甘い平底を残すが、胴部は卵形を呈し、頸に向かって大きく窄まり、頸部はなだらかに外反し口唇部に向かう。口唇部は打ち欠により欠失。形状は近隣の大浦前田古墳下で発見された甕棺に近似し、複合口縁甕棺出現前後の在地系甕棺の様相を示す好資料である。



1．神在横畠遺跡　2．加布里遺跡群　3．国史跡「釜塚」　4．国史跡「一貴山銚子塚」

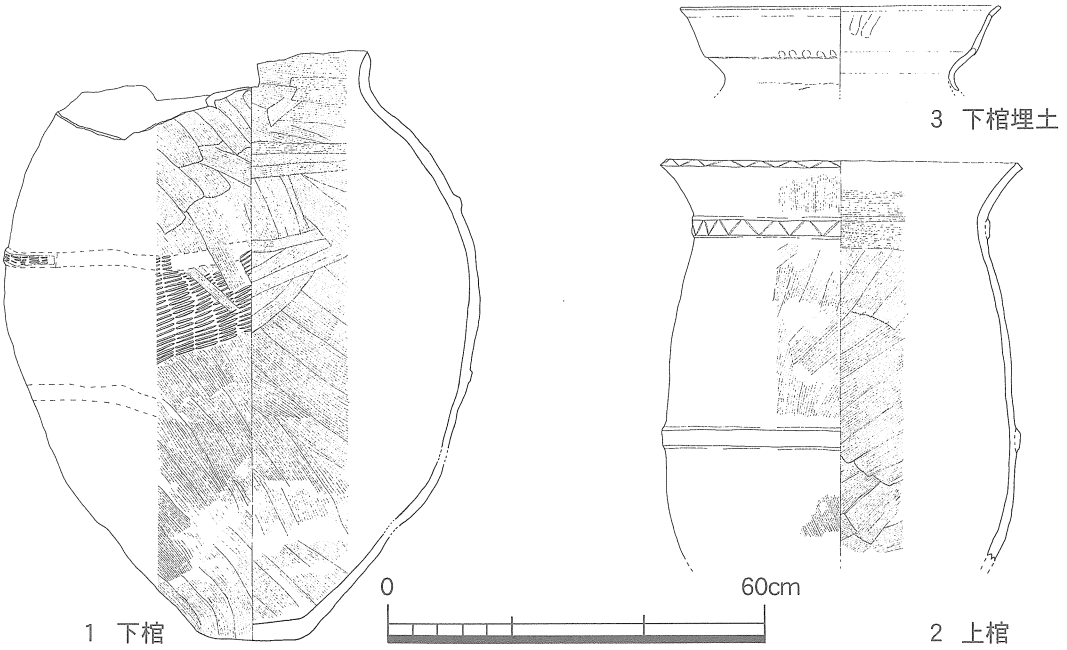
5．神在遺跡　6．神在古墳　7．東二塚古墳（東二塚遺跡）　8．東遺跡群　9．八幡宮境内遺跡

10. 東五反田遺跡　11. 東真方古墳群　12. 東若宮遺跡　13. 奈良尾遺跡　14. 本田孝田遺跡

15. 林崎古墳　16. 長嶽山古墳群（宇美八幡宮境内遺跡）　17. 飯原門口遺跡　18. 長野宮ノ前遺跡

19. 長尾山古墳　20. 迫山古墳　21. 別処古墳群　22. 野呂高原遺跡　23.天保年間領地境石群

第５図　長野川流域における主な遺跡の配置（1／50,000）



第６図　東若宮遺跡出土甕棺実測図（1／12）

現在までに知られる長野川流域最古の前方後円墳は林崎古墳である。現況では前方部端が埋没しているため、墳形ははっきりしないが、全長は30ｍほどの小型の前方後円墳であろう。古墳裾で行なわれた土取りの際に発見された箱式石棺から人骨とともに内行花文鏡片が出土している。石棺付近から出土した壷、高杯などから布留式古段階に位置付けられる。東真方Ｃ－１号墳からは主体部の組合せ式箱式石棺内から小型方格規矩鏡（径9.2cm）が出土している。

長野川河口近くには糸島最大の前方後円墳（全長103ｍ）である国史跡「一貴山銚子塚古墳」と糸島最大の円墳である国史跡「釜塚」（径56ｍ）が、川を挟んで対峙する。

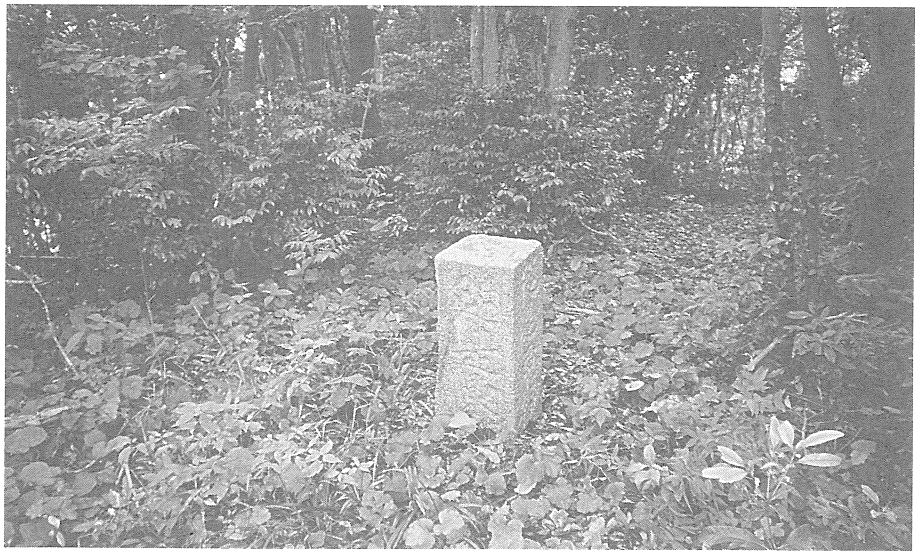
真方Ａ－１号墳は全長20ｍほどの６世紀中頃に築造された帆立貝形の前方後円墳であった。神在上ノ山古墳群では、終末期の古墳石室から須恵器、鉄器、装身具が出土している。この他、長尾山古墳、長嶽山古墳群、林崎古墳、東二塚古墳など河川中流域の古墳の測量調査も行なわれ、古墳資料の空白地帯から脱却しつつある。

歴史時代の遺跡では奈良尾遺跡が調査された。今宿バイパス建設にともなう1989年の発掘調査で奈良時代の製鉄遺構が発見されている。

中世の遺跡としては東五反田遺跡が注目される。東西55ｍ、南北40ｍの方形に環濠を配した戦国末期の居館跡が発見された。地元には長く原田氏の開祖原田種直の屋敷跡と伝えられていた。周辺には八幡宮境内、東下田、東高田遺跡など、中世環濠居館址の遺跡が点在する。東地区一帯は古くは原田荘と呼ばれ、中世原田氏の活動拠点のひとつであったと考えられるが、一連の遺構群はこれを裏付ける資料として貴重である。

近世には前原宿と深江宿を結んで唐津街道が神有村を横断していた。赤坂には長野川の右岸近くに番所が設けられていたという。

宮地嶽の山稜東端には天保年間頃に福岡藩領多久村、中津藩領神在村、幕府領東村との境界を定めるために立てられた境界石が、今も現地に残る。ここから２km東にある山林内にはこの境界石と対なす同じく天保年間頃に埋設されたとみられる13個の境界石群が現存しており、また、境界表



第７図　宮地嶽に残る藩領の境界石

示杭設置地点を記した境絵図も残っていることから、これらとあわせ、当時の幕藩間の領有権争いの厳しさを示す資料として貴重である。

参考文献

（１）糸島郡教育会　『糸島郡誌』1927年

（２）大神邦博　「長野宇美神社境内遺跡」『伊都』第３号　1970年

（３）岡部裕俊　『長野川流域の遺跡群』Ⅰ　前原町教育委員会　1989年

（４）小池史哲　「糸島の縄文文化」『三雲遺跡』Ⅱ　福岡県教育委員会　1980年

川村博　『井原遺跡群』　前原町教育委員会　1982年

（５）大神邦博　「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」『古代学研究』53号 1968 年

（６）岡部裕俊　『井原遺跡群』　前原町教育委員会　1991年

（７）小林行雄他　『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』16　福岡県教育委員会　1952年

（８）石山勲　『釜塚』　前原町教育委員会　1979年

（９）角浩行　『今宿バイパス関係文化財調査報告書』Ⅲ　前原町教育委員会　1993年

(10) 角浩行　『今宿バイパス関係文化財調査報告書』Ⅰ　前原町教育委員会　1992年

(11) 石井扶美子　『神在上ノ山古墳群』　前原町教育委員会　1983年

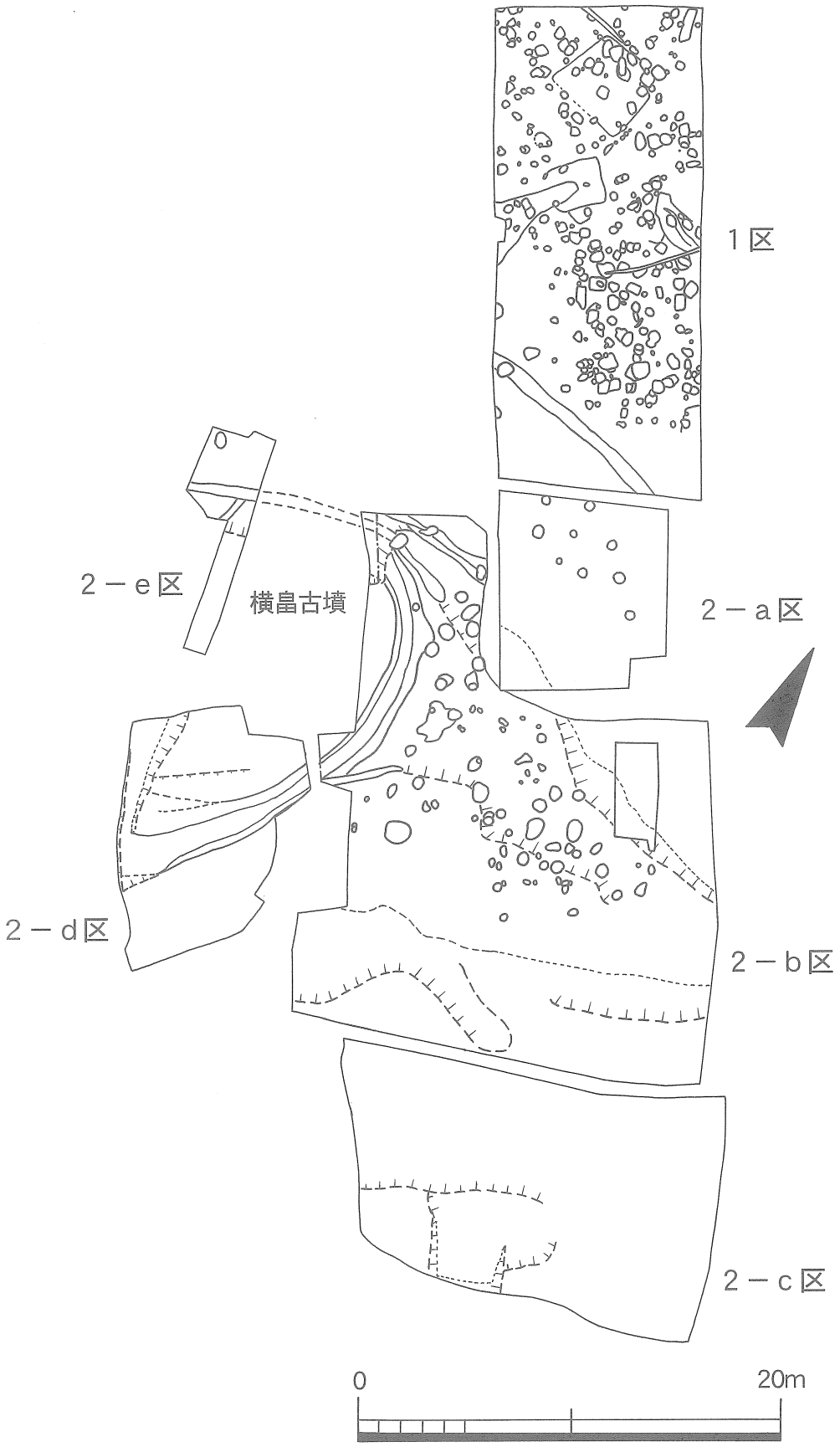
(12) 中間研志　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』13　福岡県教育委員会　1991年

(13) 岡部裕俊　『長野川流域の遺跡群』Ⅱ　前原町教育委員会　1990年

(14) 丸山擁成　「中世後期の北部九州の国人領主とその軌跡」『福岡県地方史研究』第15号1997年

(15) 川村博忠　「筑前怡土郡における幕府領と福岡藩領の境界列石」『歴史地理学と地籍図』1997年

林　覚　「前原市大字東・多久・富に所在する江戸時代の境石について」『会報測量』第23号　1994年



第８図　調査地点全体図（1／300）

２．調査の内容

（１）発掘調査現場での協議経過

調査を実施するにあたって、現場の管理上、事前に協議すべき課題がいくつかあった。

一点目は既存家屋の取り扱いであった。当初はまだ家屋が建っていたため、調査にあたっては家屋の解体撤去が前提である旨を伝え既存家屋の解体をお願いした。

二点目は、現場における雨水等の排水方法であった。現場は谷地で山側に降った雨水が集まってくる上、山際の切り通しでは常時湧水も確認されていた。現地付近には整備された用排水路がなくかねてから雨水に対し地元では常に神経を尖らせていた。調査地点のプール化による事故の危険性もあって、周辺住民からも不安の声が寄せられた。そこで表土除去掘削後に調査地点の堆水を防ぐため24時間稼働の排水ポンプを設置することとした。

三点目は調査によって生じる廃土の取り扱いであった。試掘によって遺構面までの深さが最深部では２ｍ以上に達することがあらかじめわかっていたため、多量の廃土が予想された。しかし、現況では通路が狭く場外に廃土を持ち出すことができなかったため、場内に積み置く以外方法がなかった。調査地点では広い土砂置場は確保できないので、試掘結果をもとに調査の必要な範囲を絞りこみ最終的には発掘対象範囲を建物建設予定範囲と侵入道路敷地まで絞りこみその他の地域については、工事にあたっては現況の維持につとめ、特に山側の斜面では現況の植栽を生かした庭園として地形の保持に努めることで双方了承した。

しかし、結果的には、発掘調査によって排出された土量が当初の予定を上回り、廃土置場の確保が難しくなったため、最終的には調査区を南北２区に分け、北から調査を開始し、廃土を反転させて土置場を確保しながら調査を進めることとなった。

以上の協議が長期化したため、発掘調査の開始は平成９年２月と大幅に遅れたことから、調査期間は平成８年度から９年度にかけ年度を跨いで行なうこととなった。

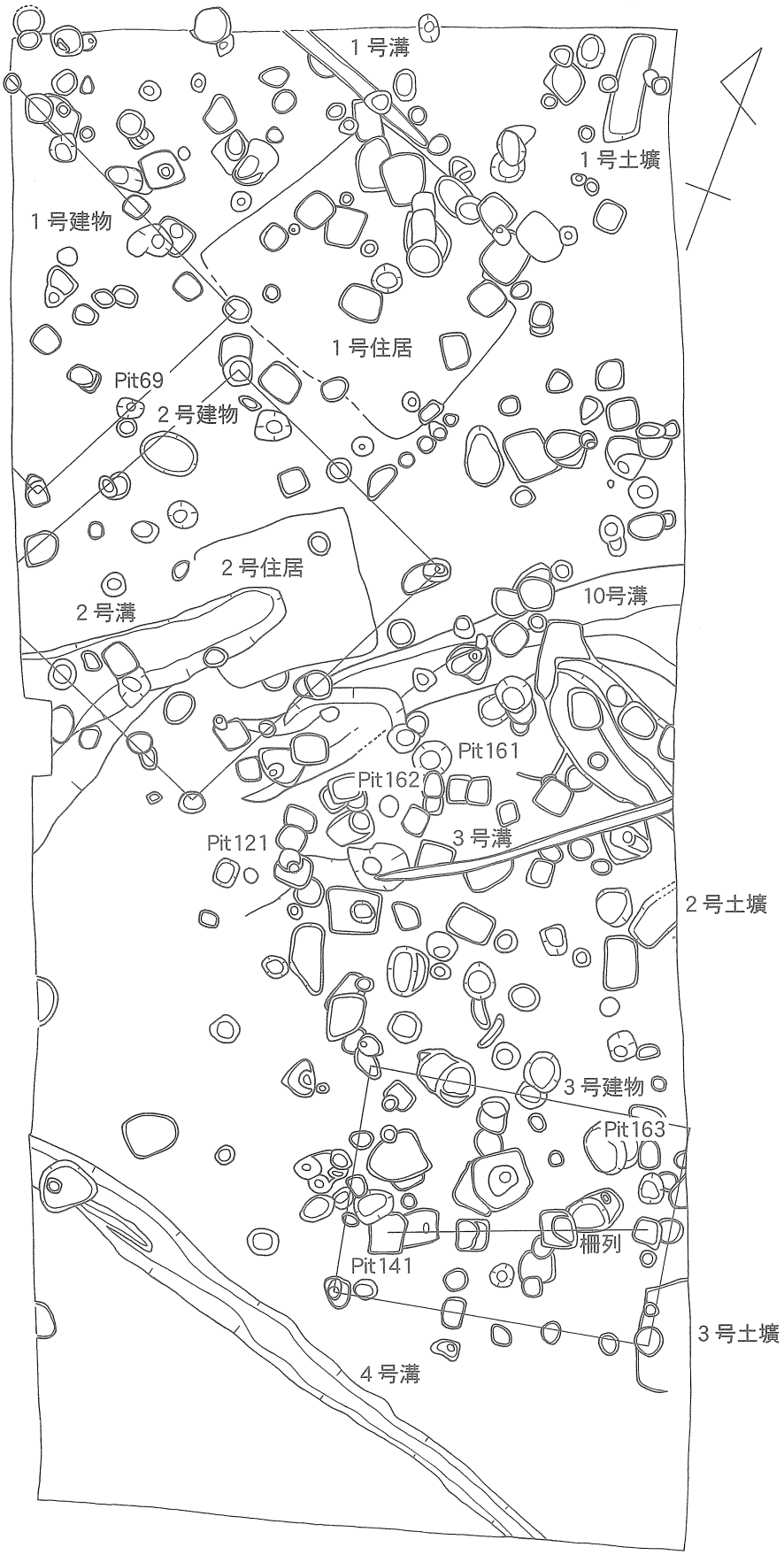
（２）調査地点の概要

調査地点は、前述のように宮地嶽北西裾にむかってに伸びる２筋の尾根に挟まれた狭い谷間に位置する。調査区はこの谷間を横切るように南北に長いものとなった。調査区の南端は谷斜面にかかっているため、表土下20～30cmで遺構面を検出することができたが、谷底に達すると遺構面は深くなり、最深地点では現地表から３ｍに達した。そこからさらに北では、尾根斜面裾に達し、徐々に浅くなっていった。

前述のように調査は２区に分割して行なったが、第８図にみるように北の遺構集中区を１区、それ以外を２区とし、２区はさらにａ～ｅの５小区に分かれた。（第８図）

現場の基本的な土壌の堆積状況は以下のとおりである。

マサ土、赤褐色土の宅地整地層の下には奈良～中世の遺物を包含する灰褐色粘質土層、その下には弥生後期～古墳時代の土器を包含する黒褐色土層、さらにその下に弥生時代中～後期の土器を含む灰色粘質土層が堆積する。遺構が検出されたのは、黒褐色土層下の灰色粘質土上、あるいは赤褐



第9図　1区遺構配置図（1／100）

色土層上で、時期的には古墳時代から～奈良時代を中心とするものである。

検出遺構の分布の特徴としては、遺構の集中地点が１区の北斜面と、２区の南斜面裾部に集中し、２区の南端では逆に表層は削平を受け、遺構はほとんど検出することができなかった。谷底ではトレンチによって古墳時代遺構面の下黒褐色砂質土層下には弥生時代の流路と推定される溝上遺構を検出したが、さらに50cm～１mほど現場を下げる必要が生じ、現場の安全管理に問題があると判断して調査を断念した。

当初、２区は１区と同様に幅８mとしたが（a～c区）、進入路の試掘で古墳の周溝を検出したため、急きょ２区の調査区を西に拡張し（d、e区）、古墳の遺存状況の確認に努めた。

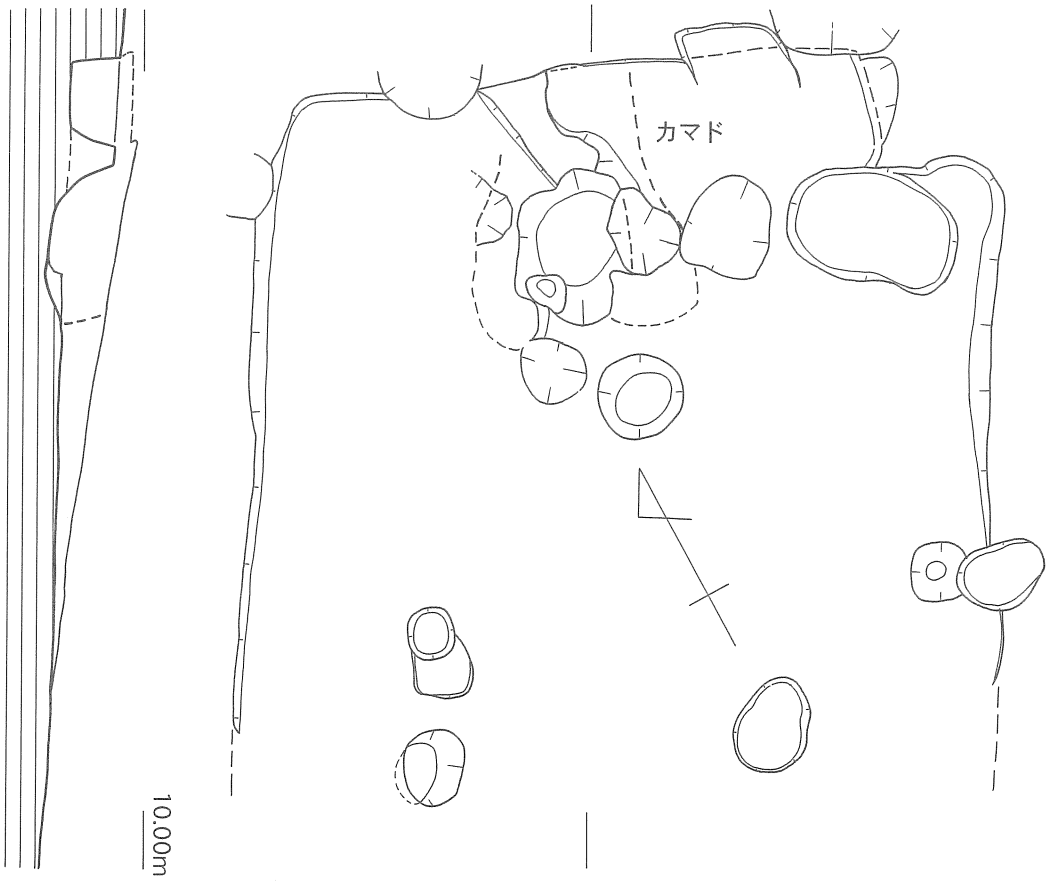
（3）Ⅰ区の遺構、遺物

竪穴住居

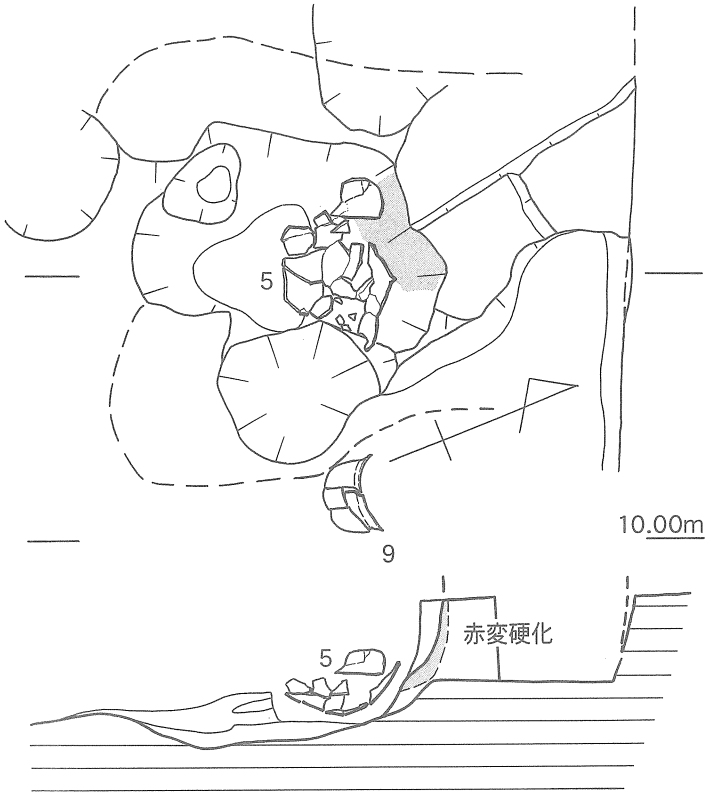
１号住居（第９,10図、図版３）

調査区の北部で検出した方形プランの竪穴住居である。西壁が削平されているため正確なプラン、規模等は確定しないが、主軸をN－29°－Eとすれば、長さ3.4m以上、幅3.9mとなる。深さは東壁で深さ38cmを残す。

床面で検出した柱穴はいずれも浅く主柱を特定するにはいたらなかった。床面付近で須恵器、土師器、土錘などが出土した。



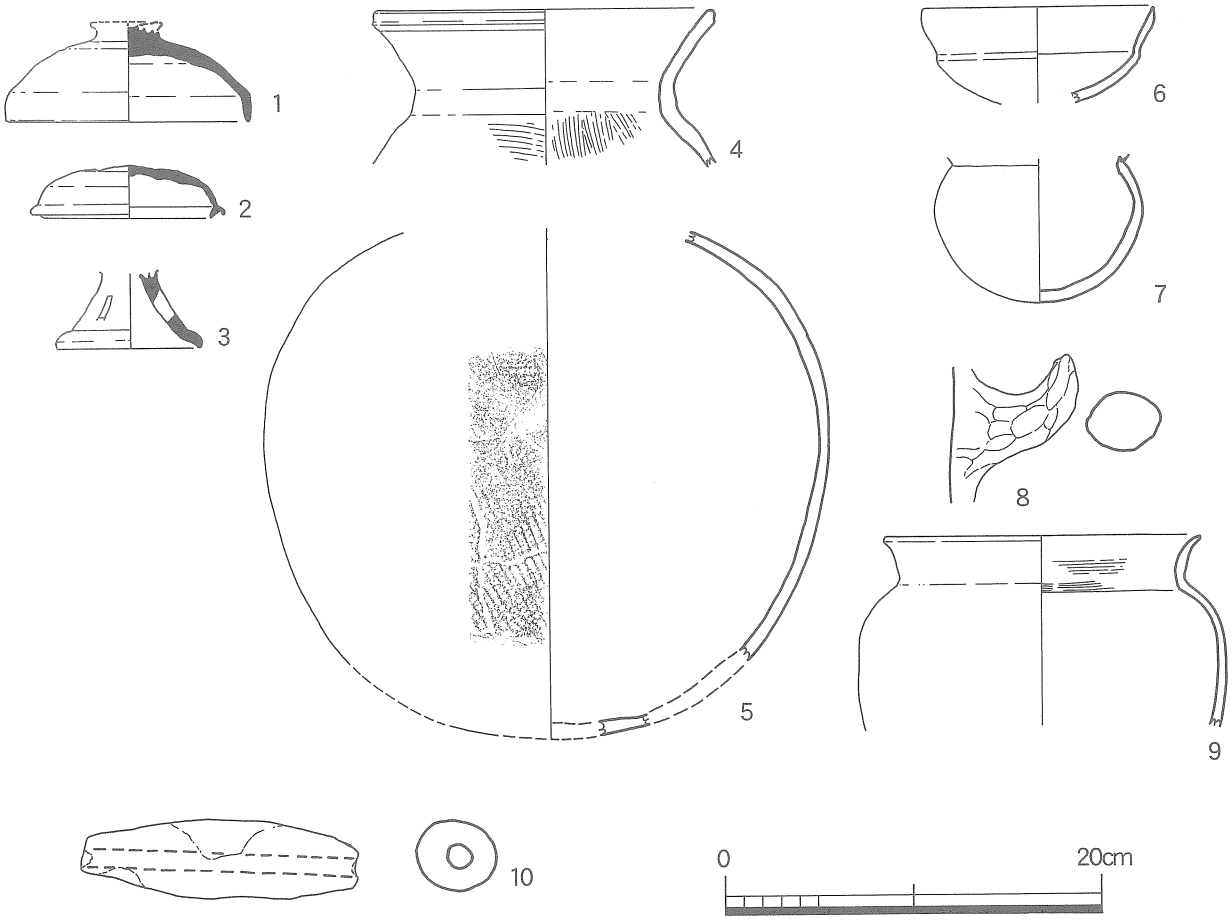
第10図　１号住居実測図（1／40）



第11図　１号住居跡カマド実測図（1／20）

カマド（第10図、図版４）　住居東壁面の中央部に黄色粘土で築かれた造付けのカマドを検出した。遺構は後世の柱穴の掘り方に切られていたうえ、住居廃棄時に意図的に破壊されたのか両袖部は押し潰れた状態で検出し、わずかに奥壁が旧状をしのばせるにすぎない。平面プランは基底部の黄色粘土塊から推定した。

住居の壁から焚口までの長さは140cm，幅120cmほどで、残存高は奥壁で38cmを計る。焚口はカマドのやや北に寄っており、口の部分には土が盛られ床よりやや高くなっている。焚口の前面に見える円形の浅いくぼみは灰の掻きだし場である。燃焼部は方形プランで長さ50cm、奥行75cm。床面より一段掘りくぼめられていた。



第12図　１号住居跡出土遺物実測図（1／4、10は1／2）

燃焼部底面では顕著な赤変硬化はみられなかったが、奥壁では厚さ１～４cmの赤変硬化が観察された。燃焼部奥部の床近くから土師器甕がまとまって出土しているが（図版４－ａ）、あたかも上面は土圧で潰れ下半部は旧状を保っていることから、カマド廃棄の際にここに意識的に据えられていた可能性も考えられる。

出土土器（第12図、図版19）　１～３は須恵器、４～９は土師器、10は土錘である。

１は床面直上で出土した有蓋高杯の蓋である。口径12.7cm、２は杯蓋である。住居を切って掘りこまれた柱穴底から出土した（図版５－２）。復元口径8.8cm、高さ2.85cmである。３は埋土からの出土で短脚高杯の脚部である。脚柱に長方形の透し孔が切り込まれる。

４は甕の口個縁部で、床面直上で出土した（図版５－４）。復元口径17.4cm。５はカマド燃焼部からまとまって出土した甕で、口縁部を欠いている。球形の胴部の表面に擬格子の叩き痕が、また内面には同心円の当て具痕が残る。色は淡橙褐色で表面には煤が付着する。

６は杯で口径12.4cm。床直上で出土した（図版５－６）。７は柑で口縁部を欠く。床直上で出土した。

８は牛角把手である。９はカマド付近の床面上で出土した甕で、復元口径16.8cm。表面は火を受けての劣化、表面剥落が著しい。

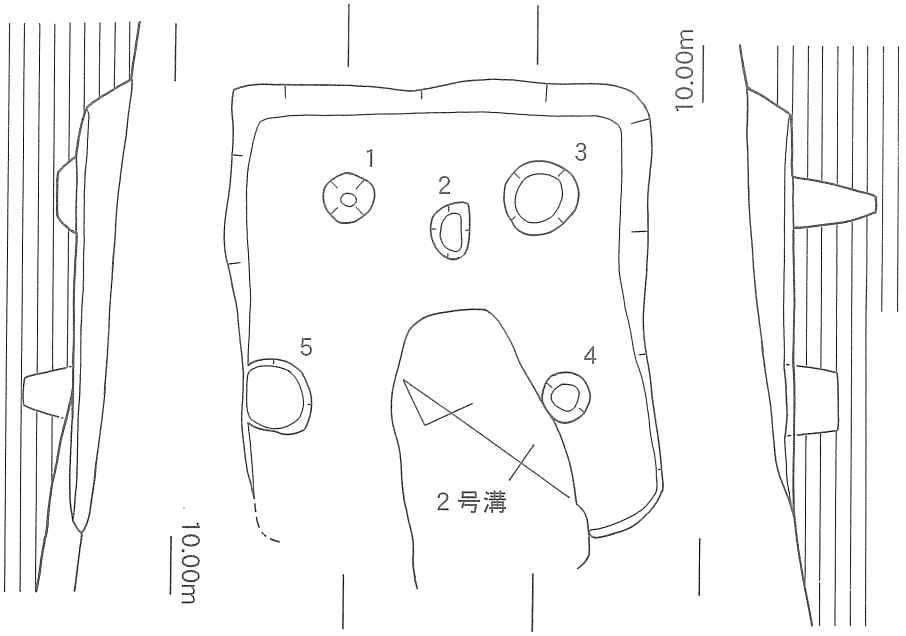
10は土錘で長さ7.2cm、計2.2cmを計る（図版５－10）。

２号住居（第13図、図版６）

遺構の南西壁は削平を受け一部壁の立ち上がりが完全に失われていて確定できないが、平面プランは長さ2.4 m、幅2.2 mほどで、深さは最も深いところで、24cm。主軸をＮ－55°－Ｅに向ける方形プランを呈する。遺構の西部は２号溝に切られる。

床面から５個の柱穴を検出したが、大きさ、深さともに不揃いで、かつＰ－４、５は主柱とするにはやや壁側にはずれた位置に掘りこまれているため主柱として統一性に欠ける。カマドは確認できなかった。

小型の竪穴住居と推定したが、住居と結論付けるにはやや根拠不足の感もある。



第13図　２号住居実測図（1／40）

掘立柱建物

調査区内では多くの柱穴を検出し、方形プランのしっかりした柱穴も多く検出したが、建物として復元できたものは小型の柱穴群による３棟である。未検出の建物があるものと考えるが、筆者の力量不足で十分に検証することがずきなかった。

１号建物（第14図）

調査区の北西部で検出した建物で、現状では２間×２間のプランまで確認できるが、遺構はさらに調査区外に延びている可能性があり、正確なプランは確定しない。柱間がわずかに北西方向に長いため、主軸はＮ－65°－Ｗとみられる。

現状では梁行4.2m、桁行4.08mを測る。柱掘り方は不整方形を基本とし、径36～42cm、現存する深さは最も深いもので52cm程度である。

２号建物（第14図）

調査区の中央部、柱穴群の南端で検出した。東西方向に主軸を持つ建物で、主軸をＮ－26.5°－Ｅに向けている。柱間は一定ではなく東壁では２間、西壁では３間である。柱間の距離もばらつきが著しい。梁行5.04m、桁行4.16m。柱掘り方はプラン、大きさともにばらつきがあり掘り方の平面プランも不ぞろいである。

３号建物（第14図）

調査区の北西部１号建物の南に隣接して検出した建物で、主軸をＮ－81°－Ｅに向けている。梁行３間で5.04m、桁行は北２間、南３間で、4.24m。柱間は一定ではない。

柵列（第９図）

現状では一列に並ぶ柱穴群で柵列状を呈するが、掘り方は一様に浅く、南側にプランが延びる建物の一部である可能性もある。掘り方プランは基本的には方形であるが、プランがやや乱れ、一部に二段目の不整形な堀り方が認められていることから、柱の抜き取りが行なわれたものと推測される。柱間は1.3m前後で均等に並ぶ。

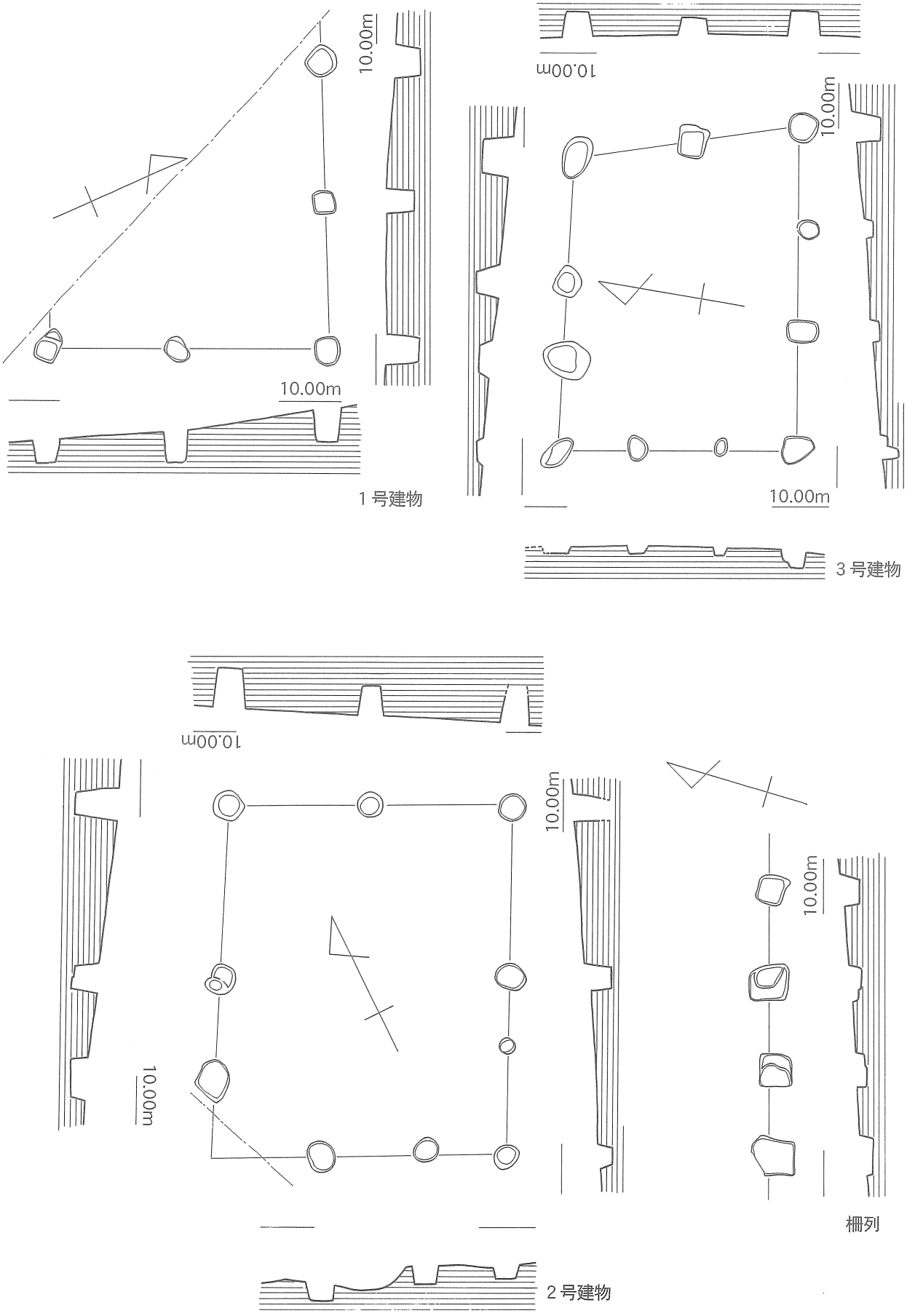
土壙

１号土壙（第15図）

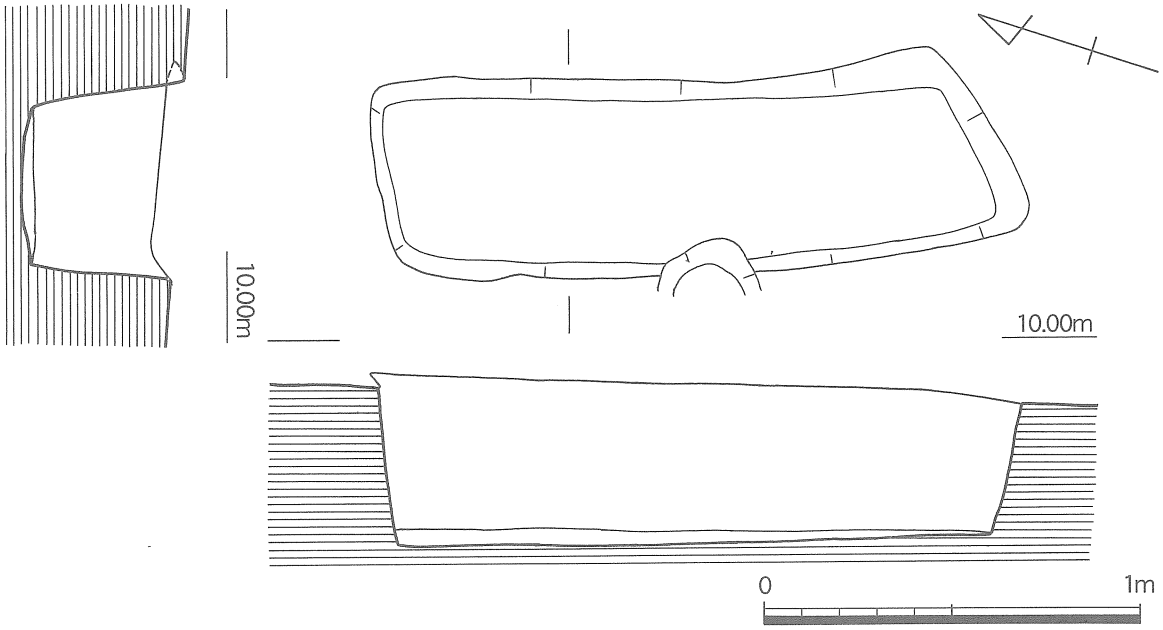
調査区の北東隅で検出した長方形の土壙である。主軸方位はＮ－6°－Ｗ。全長163cm、幅51cm、深さ42cmを計る。南側が若干幅広になる。出土遺物がないため時期は明らかでないが、土壙墓の可能性がある。

２号土壙（第９図）

２号建物の北で検出した長方形の土壙で、北東端部は調査区外になる。幅61cm、深さ18cmで、主軸方位は概ねＮ－26°－Ｅ方向と推定される。１号土壙と同様、時期は明らかでないが、土壙墓の可能性がある。埋土から土師器（117）が出土した。



第14図　1区堀立柱建物実測図（1／80）



第15図　１号土壙実測図（1／20）

３号土壙（第９図）

柵列の南で検出した。東半分は調査区外に残る。深さは10cmほどである。

溝

１号溝（第９図）

調査区の北端で１号住居から北西に向かってのびる幅28cm、深さ８cmほどの小溝。１号住居にともなう排水溝の可能性がある。

２号溝（第９図）

２号住居を切って掘られた溝で、断面は浅いＵ字形。西側の下流に向かって幅が広がってゆく。

３号溝（第９図）

調査区の中央東からのび、中央部で途切れる。幅20cm程の小溝である。

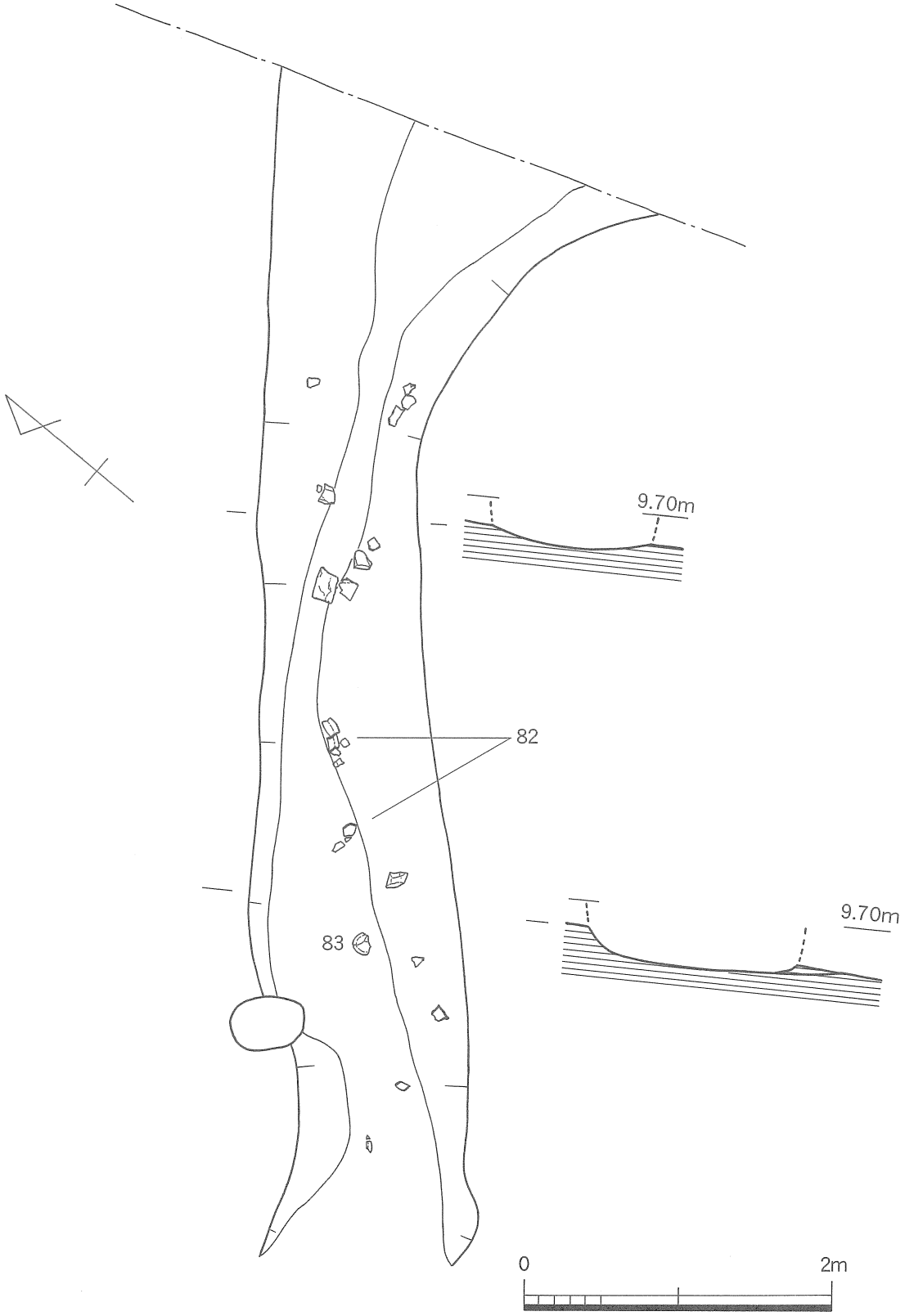
４号溝（第９、15図）

調査区の南端を南東から北西方向に向かって横切る溝で幅70cm程度の小溝である（図版６）。溝を境に南地区では遺構数が激減しており、北側集落の集落範囲を示す区画溝であった可能性がある。埋土から須恵器、土師器が出土している。

10号溝（第16図、図版８）

２号住居の南で検出した浅い溝で、幅１ｍほど、底面から土師器、須恵器が出土している。

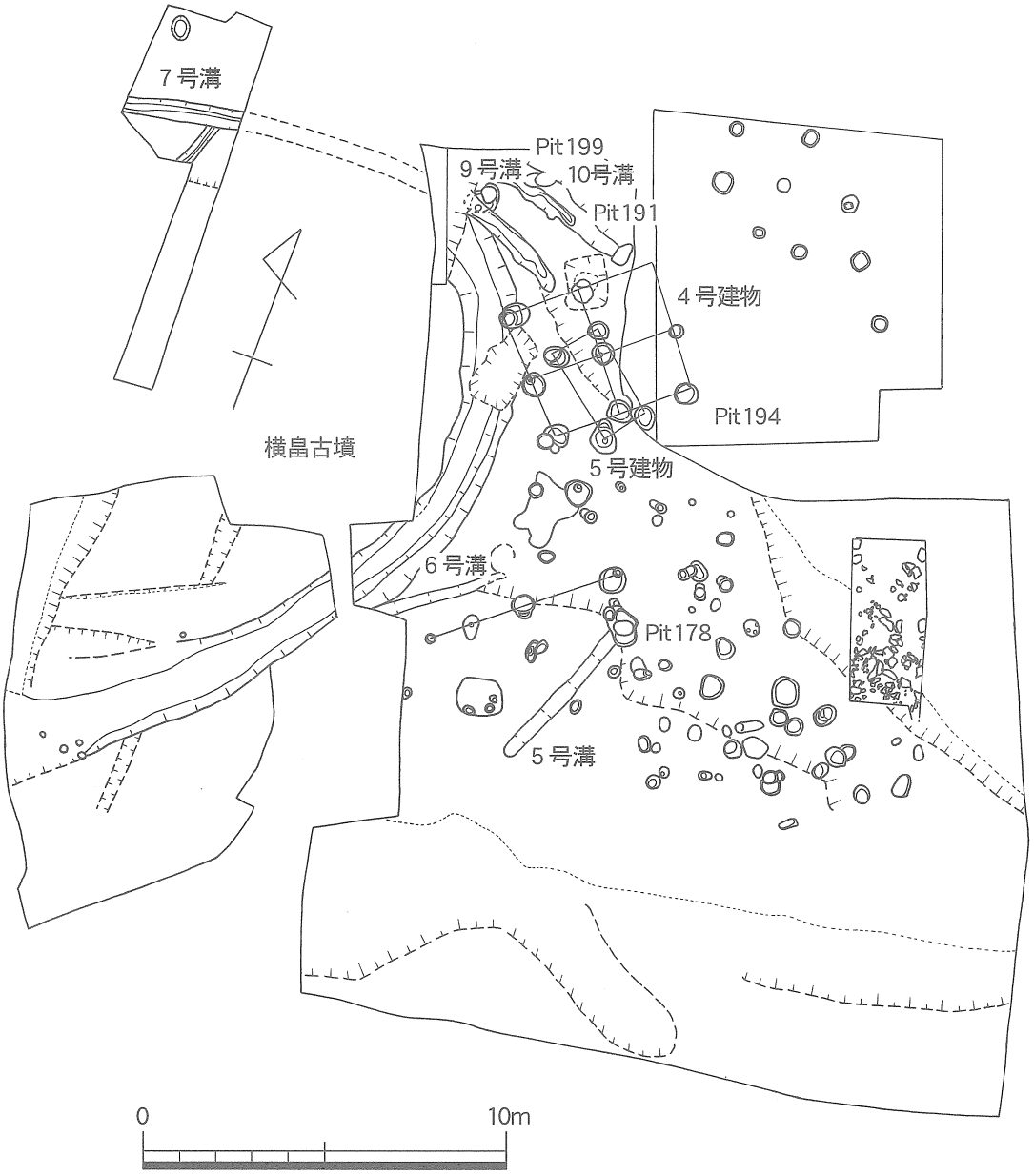
出土土器（第24図、図版25）　82は小型丸底壷である。口径11.2cm、高さ10.5cmを計る。外面から内面口頸部にかけて丁寧な研磨が行なわれ、器壁は薄く仕上げられている。83は杯である。口径13.7cm、高さ5.4cm、内面は丁寧な研磨が施される。84は高杯脚部で脚柱部に縦方向の研磨が行なわれる。85は須恵器杯蓋である。口径13.6cm、高さ4.1cmを計る。



第16図　10号溝遺物出土状況実測図（1／40）

（4）横畠古墳

敷地の進入路造成箇所の遺構確認のためにトレンチを設定したところ、地山を掘削した幅２ｍほどで断面逆台形の弧状にカーブする溝を検出した。埋土を掘り下げたところ溝底部付近から埴輪片が出土したため、調査域を拡大し、溝の延長方向の確認を行なった。その結果溝が弧状に巡っていることが判明し、溝の底付近からさらに多くの埴輪片が出土した。古墳周溝の一部であると判断し、溝で囲まれた円内にトレンチを設定して墳丘の確認に努めるとともに。古墳の平面形および規模を確定するため、周溝を掘り下げた。



第17図　２区遺構配置図（1／200）

立地

古墳は宮地嶽から西に派生した尾根先端部の緩斜面上に築かれている。西50mに隣接して立地する釜塚が低平地に立地するのと対象的である。

墳丘・周溝

周溝によって囲まれた谷側の三分の一ほどは水田造成のために土採り・地下げが行なわれており、地山下深くまで削平されていることが判明した。残る部分も墳丘基底部付近まで削平されていたため、墳丘そのものが遺存している可能性はきわめて低いことが明らかとなった。

古墳の平面プラン、規模については墳丘の西半部が削平されているため確定できない。埴輪を有することから前方後円墳である可能性は否定できないが、前方部が存在したとすれば現況からみて谷に向かって尾根筋から直交方向に谷間にむかって張り出すことになり、常道な築造傾向とはいえない。現状では周溝から想定される墳形は円墳とするのが妥当で、その規模は径23mほどと推定される。

主体部

墳丘推定域は現況保存地区にあたることから、主体部の遺存状況と墳丘裾部の確認のためにトレンチによる確認を行なった。その結果、トレンチ中程から西に向かって下り勾配の斜面となっており、墳丘の遺存は確認されず、墳裾も確定することができなかった。西側では墳丘はほぼ完全に削平されており、主体部は既に基底部から完全に破壊されたものとみられる。

周溝出土遺物（図版20～24、第19～22、24図）

周溝埋土からは埴輪、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。土師器、須恵器ともに6世紀後半以後のものであり（図版24－63～71）、後世の集落に伴うものである。

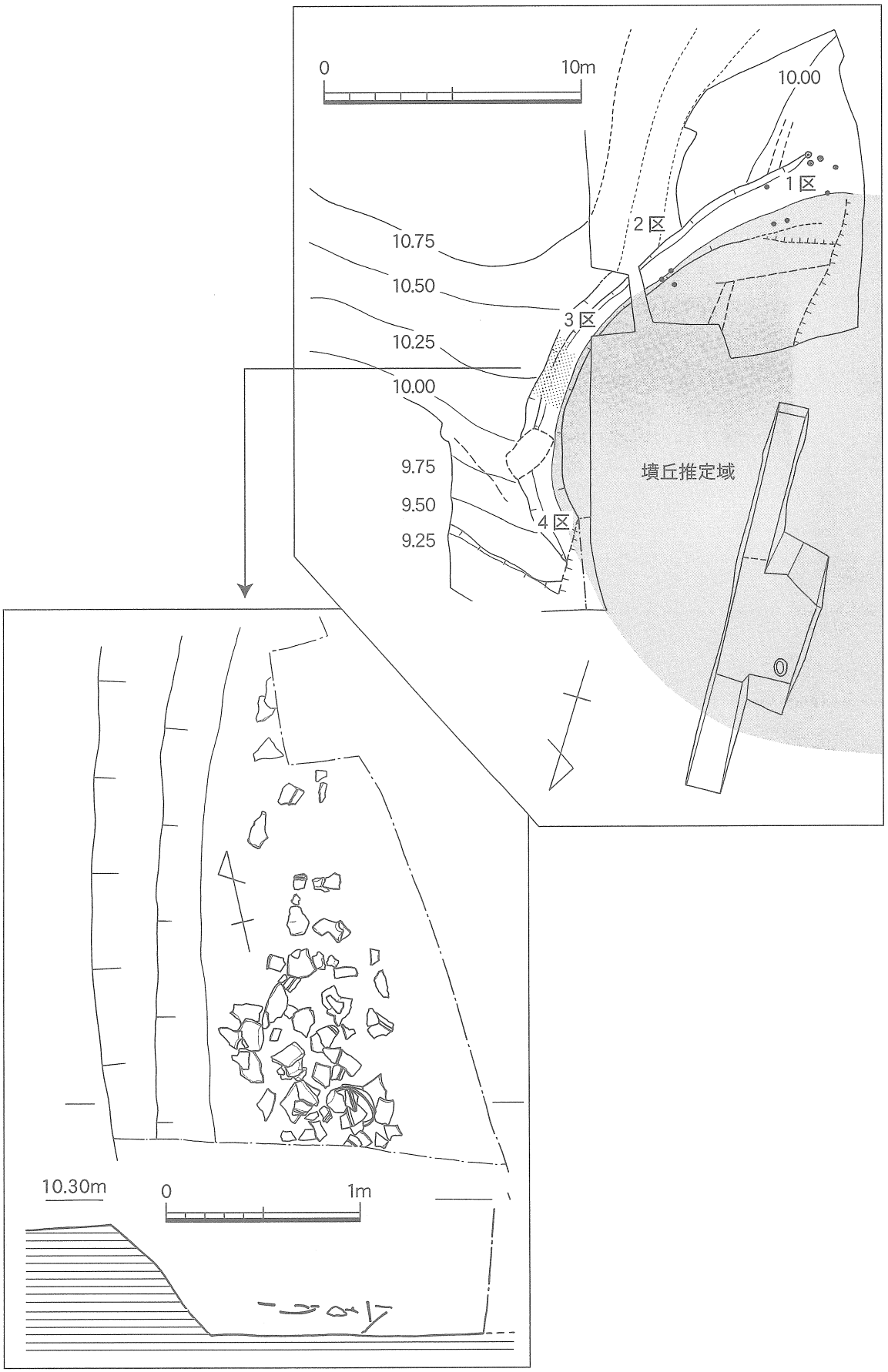
埴輪出土状況（図版13～15、第18図）

埴輪は周溝からパンコンテナ5箱程度出土した。埴輪は全形が把握できるものは皆無である。しかし、表面の遺存状態は良好で、器面調整痕は比較的よく観察できる。突帯も角の劣化は認められず、シャープさを残しており、遺存状態としては比較的良好といえる。

埴輪表面の風化・劣化が少ない理由として、焼成状態が良好であったとともに地表に表出していた時間が短かったことが推測される。これは周溝の底面近くから多くが出土していることからも裏付けられよう。一方、各個体の遺存率は低く、周溝の上位にあたる東部から埴輪が一ヶ所に集中して出土し、あたかも人為的に廃棄された状態であったことから、埴輪が比較的早期の段階で意図的に破壊、投棄された可能性もある。

埴輪（図版20～23　第19～21図）

埴輪片は150点ほど。全体を知りうる資料がないため特徴的な36点を図示した。円筒、朝顔形埴輪片ばかりである。朝顔形埴輪の認定は胴上部から口頸部にかけての形態のみで分類したため、円筒埴輪とした資料のなかにも朝顔形埴輪が含まれるものと考えられる。ちなみに、円筒と朝顔形との割合について、口頸部片数で比較してみると、ほぼ同数程度が出土していることになる。また、土器片のなかに壺形埴輪の一部ともとれる資料が2片ほど認められるものの、時期、器形を特定するにはいたらなかっので図示は控えた。器表に黒斑を有することが確認され、野焼き焼成であることをうかがわせる。表面調整から全体的に丁寧に作り上げられた印象を受けるが、ハケの単位はやや粗目である。



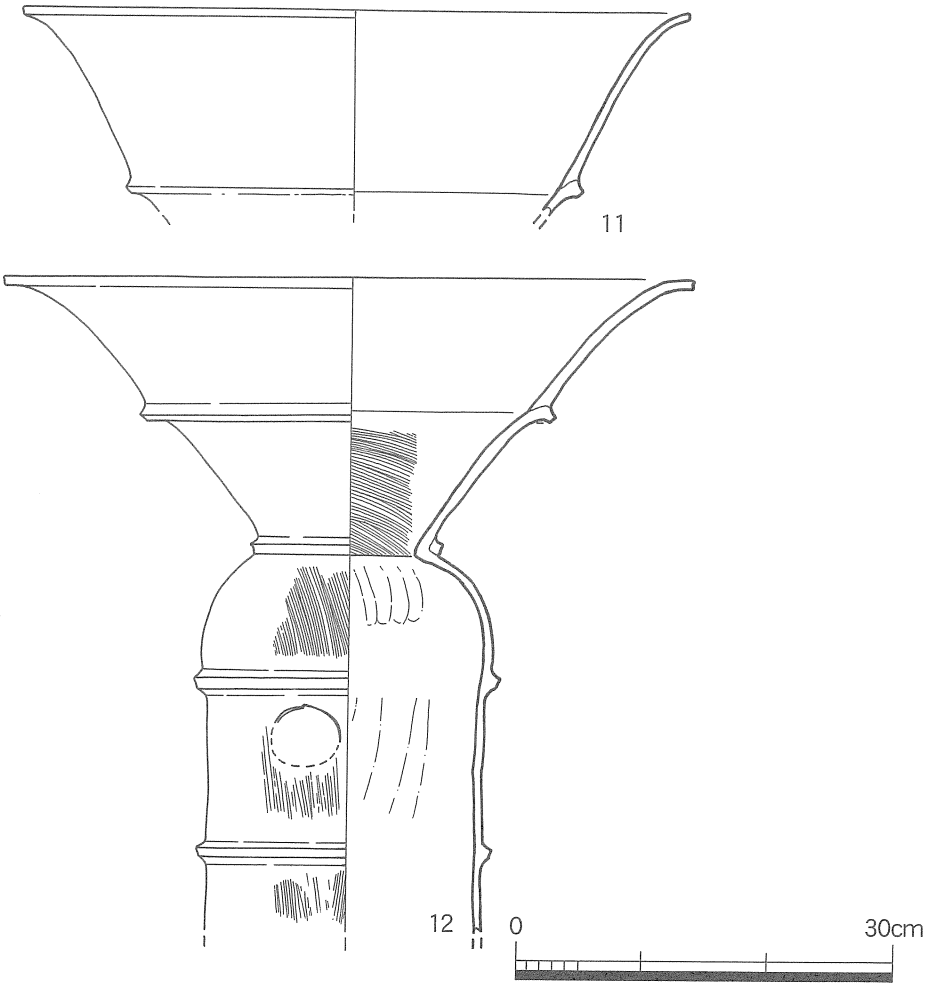
第18図　横畠古墳の推定墳丘規模（右上．1／200.・は埴輪片散布地点）と周溝３区埴輪出土状況実測図（左下．1／30）

朝顔形埴輪は８片を図示した。最も遺存状態の良好な12では、頸部は大きく直線的に外反し、擬口縁は縁がシャープである。そこから口縁部にむけてさらに直線的に開く。屈曲部の突帯はがっしりとしていてシャープである。復元した口縁径は55.4cm、くびれ部の径は14.7cm、胴部の最大径は23.4cmほどである。口頸部の外面はタテハケ、内面はヨコないしは斜め方向のハケで仕上げている。

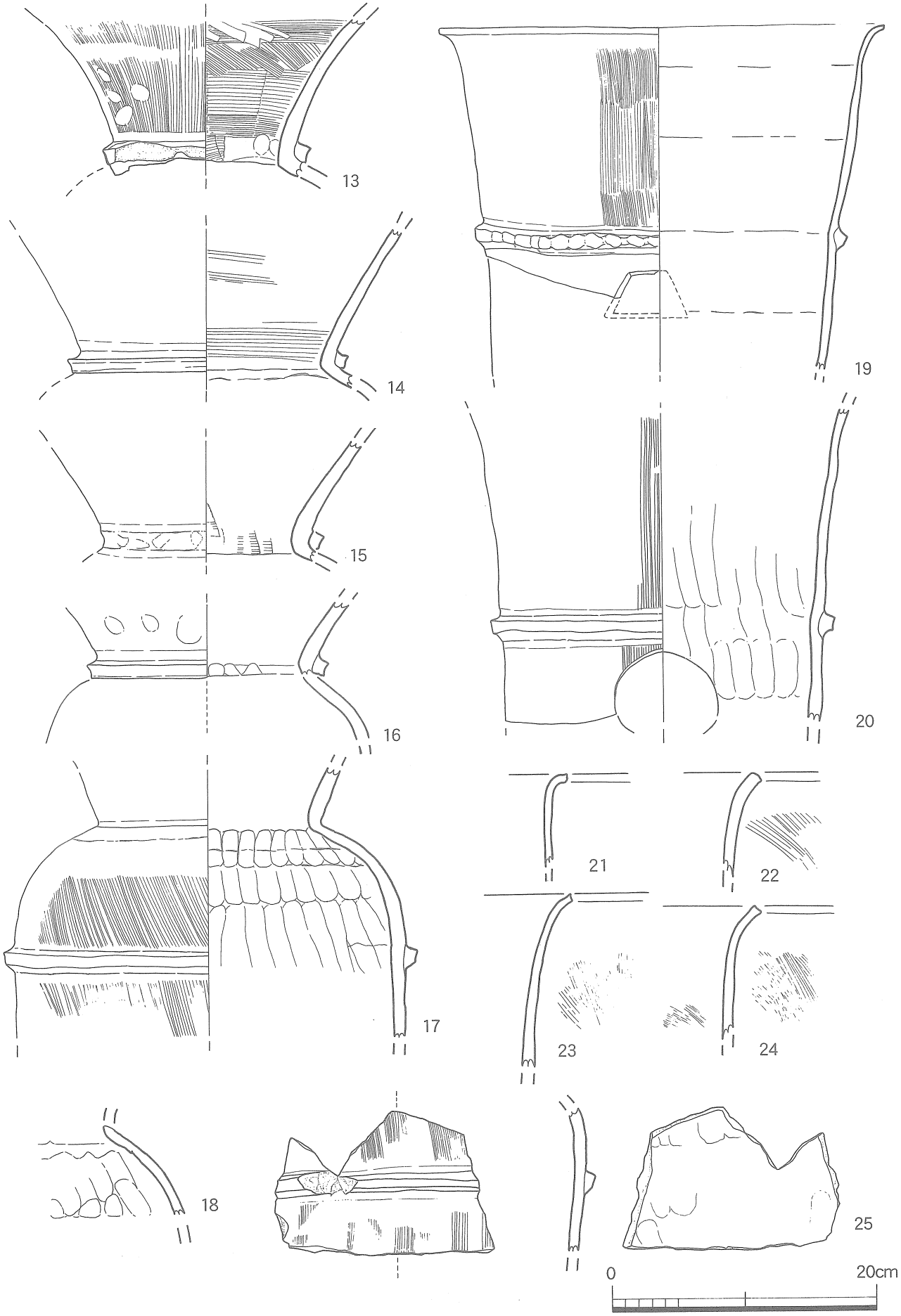
円筒埴輪は口縁部の器壁が薄く、如意状に小さく外反するが、ゆるやかに外反するものと、21のように鋭く外反するものがある。口唇部はコ字形に面をなし外傾する。透孔は突帯の直下にあり、最も遺存状態の良い12では２段目の一方に台形、他方に円形の透孔を設けている。他は円形透孔である。１段目では確実に透孔が確認されたものはない。

突帯は断面が台形で上方にむかって若干つまみあげぎみのものが多い。突帯のの間隔は29では15cm程度を測る。突帯は３～４段程度とみられるが、確認することはできなかった。突帯の高さは埴輪の厚さにほぼ等しいか、わずかに低い程度で、幅広である。19は最上段の突帯の上端を指でつぶし波状の凹凸を作り出している。装飾を意図したものであろうか。

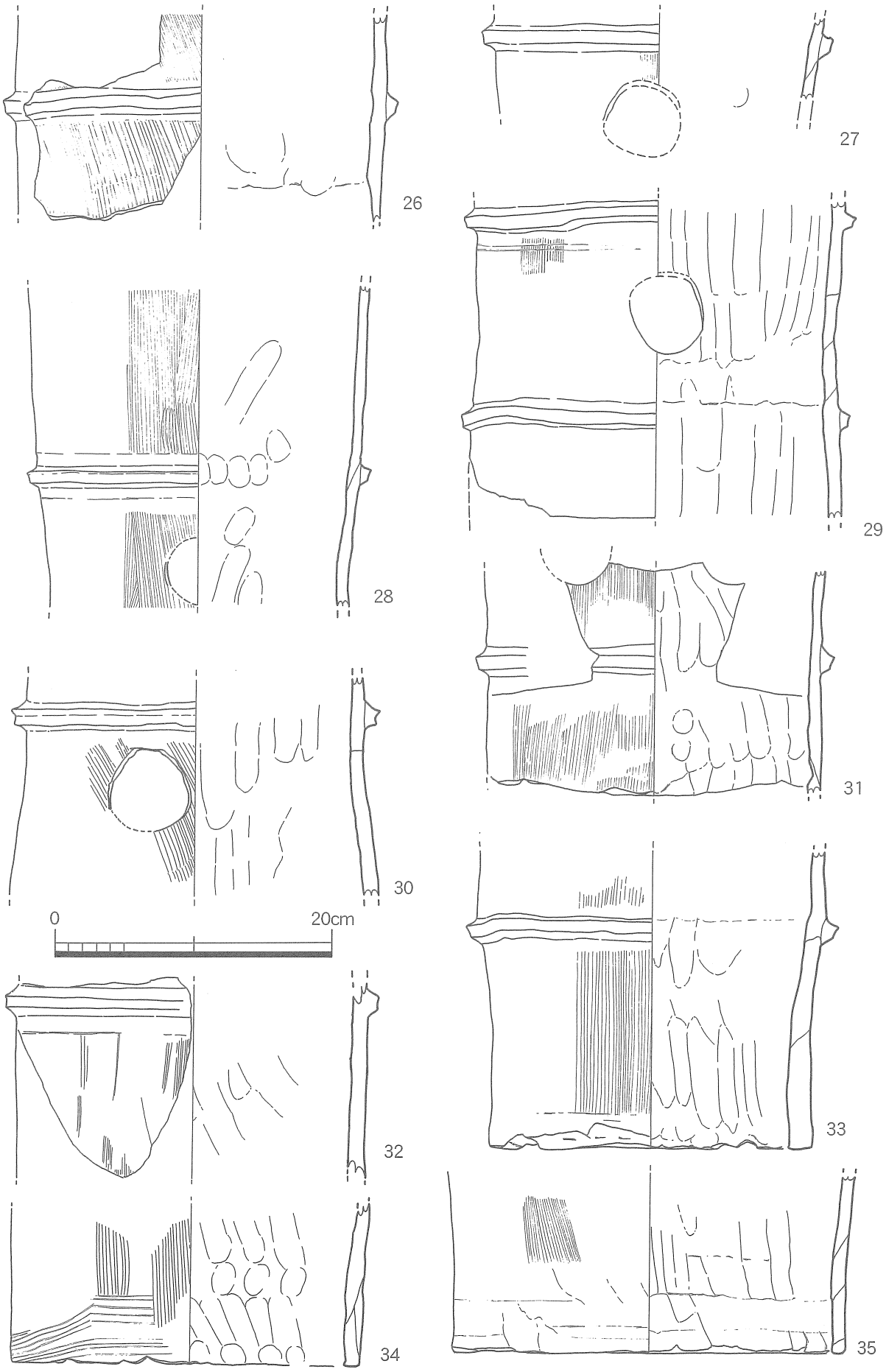
埴輪の表面調整はタテハケ１次調整で終了し、内面は縦方向のナデ、タテハケによって仕上げられているものが大半である。基底部外面にはヨコハケ、ヨコナデが行なわれているもののほか、粗くヘラケズリがおこなわれているものもある。



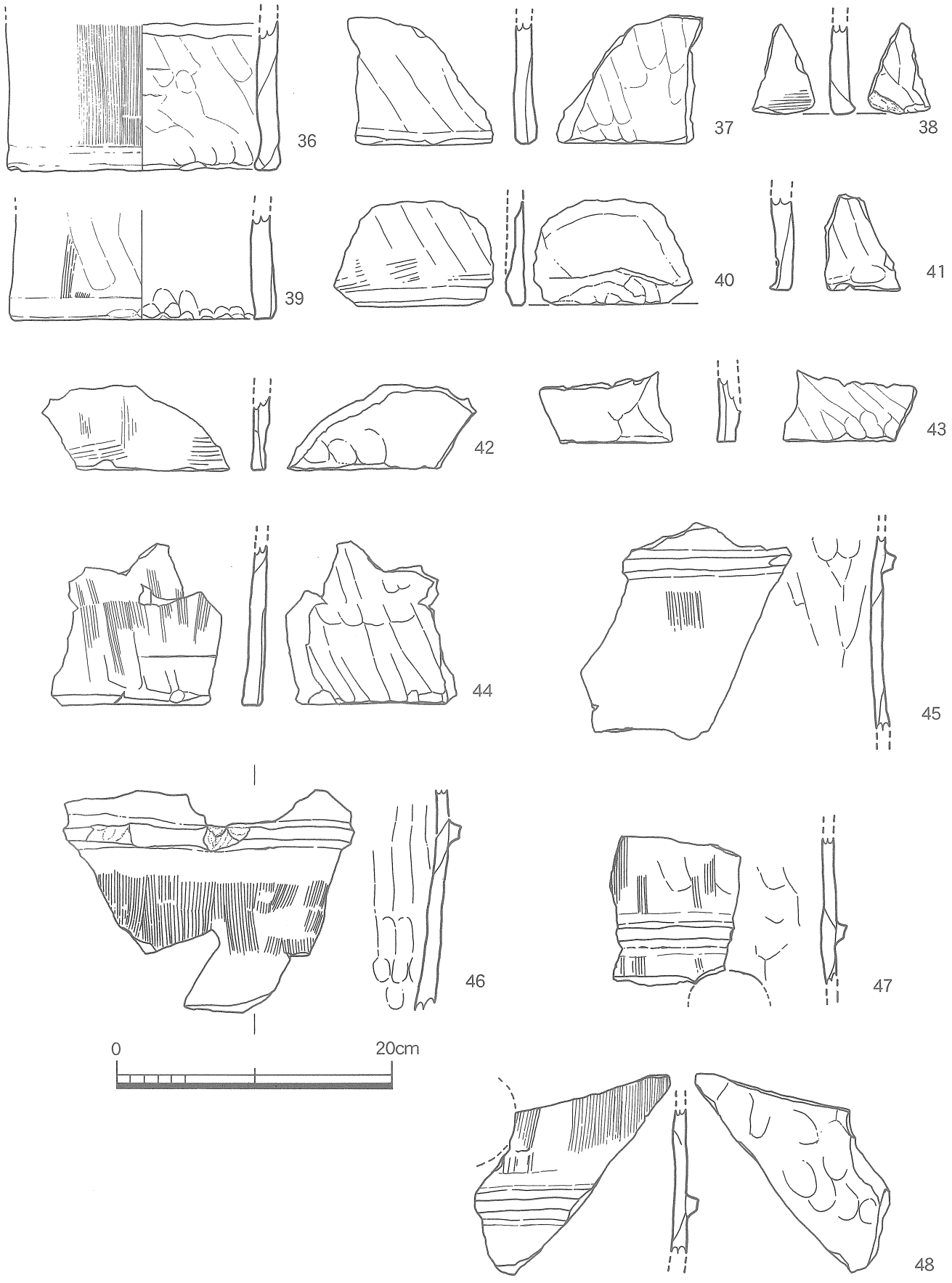
第19図　周溝出土埴輪実測図①（1／6）



第20図　周溝出土埴輪実測図②（1／4）



第21図　周溝出土埴輪実測図③（1／4）



第22図　周溝出土埴輪実測図④（1／4）

遺物番号	図版番号	挿図番号	器　種	残存部位	径(cm)	胎　土	色　調	焼成	黒斑	透し孔	備　　考
11	20	19	朝顔	口頸部	53.6	長石粒を含む	淡黄褐色	良好	有		
12	巻頭	19	朝顔	胴上部～口頸部	55.4	長石粒を含む	淡黄褐色	良好	有	円形	
13	20	20	朝顔	屈曲部～頸部	13.8	長石粒を含む	淡黄褐色	良好			
14	20	20	朝顔	屈曲部～頸部	19.2	長石粒を含む	淡黄褐色	良好	有		
15	20	20	朝顔	屈曲部～頸部	15.8	長石粒を含む	淡黄褐色	良好			
16	20	20	朝顔	屈曲部～頸部	18.6	長石粒を含む	淡黄褐色	良好			
17	21	20	朝顔	胴上部～頸下部	29.4	長石粒を含む	桃白色	良好	有		
18		20	朝顔	胴上部		長石粒を含む	黄褐色	良好			
19		20	円筒	胴部～口縁部	33.5	長石小粒を含む	桃白色	良好	有	円形 台形	
20	21	20	円筒	胴上部～口縁下	28.4	長石粒,雲母片を含む	淡黄褐色	良好	有	円形	
21		20	円筒	口縁部	－	石英,長石粒を含む	淡黄褐色	良好		円形	
22		20	円筒	口縁部	－	石英,長石粒を含む	淡黄褐色	良好			
23		20	円筒	口縁部	－	石英,長石粒を含む	淡黄褐色	良好			
24	21	20	円筒	口縁部	－	石英,長石粒を含む	黄褐色	良好			
25		20	朝顔	胴上部	－	長石粒を多く含む	黄褐色	良好			
26	22	21	円筒	胴部	26.8	長石粒を多く含む	淡灰褐色	軟質	有		
27	22	21	円筒	胴部	23.8	長石細粒を含む	明橙褐色	良好	有	円形	
28	22	21	円筒	胴部	24.6	長石粒を含む	淡桃褐色	良好	有	円形	
29	22	21	円筒	胴部	26.6	長石粒を含む	明橙褐色	良好	有	円形	
30	22	21	円筒	胴部	26.6	長石粒を含む	明橙褐色	硬質	有	円形	
31	22	21	円筒	胴部	24.6	雲母,長石粒を含む	橙褐色	良好		円形	
32		21	円筒	胴部	23.8	長石大粒を含む	灰明黄色	良好			
33	23	22	円筒	底部	23.3	長石粒を含む	桃白色	良好	有		1段目に透かし孔なし
34	23	21	円筒	底部	21.6	長石粒を含む	桃白色	良好	有		基底部外面にヨコハケ
35	23	21	円筒	底部	28.3	長石粒を含む	淡黄褐色	良好			基底部外面にヨコナデ
36		22	円筒	底部	20.0	長石粒を含む	桃白色	良好	有		基底部外面にヨコナデ
37	23	22	円筒	底部	－	長石粒を含む	淡灰褐色	良好	有		基底部外面にヨコ,ナナメ方向ナデ仕上げ
38	23	22	円筒	底部	－	長石粒を含む	淡灰褐色	良好			基底部外面にヨコハケ
39		22	円筒	底部	19.4	長石粒を含む	灰褐色	良好			基底部外面にヨコナデ 内面に連続指押さえ
40	23	22	円筒	底部	－	長石粒を含む	桃白色	良好			基底部外面にヨコハケ
41		22	円筒	底部	－	長石粒を含む	桃白色	良好			基底部外面にヨコナデ
42	23	22	円筒	底部	－	長石粒を含む	明黄褐色	良好			基底部外面にヨコハケ
43		22	円筒	底部	－	長石粒を含む	明黄褐色	良好			外表面劣化剥落　内面ナナメナデ
44	23	22	円筒	底部	－	長石粒を含む	桃白色	良好	有		
45		22	円筒	胴部	－	雲母片,長石粒を含む	明黄褐色	良好	有		
46	23	22	円筒	胴部	－	長石粒を含む	黄褐色	良好	有		
47		22	円筒	胴部	－	長石小粒を含む	黄褐色	良好		円形	
48		22	円筒	胴部	－	長石粒を含む	淡灰黄色	良好	有	円形	

第１表　横畠古墳出土埴輪観察表

（5） 2区の遺構、遺物

1区の南、小谷を挟んで南岸山裾斜面一帯を2区とした。したがって横畠古墳は2区に含まれる。南端の山裾斜面では遺構、遺物は検出されず、下段のテラス面から西緩斜面にかけて遺構が検出された。検出した遺構は柱穴、溝などである。

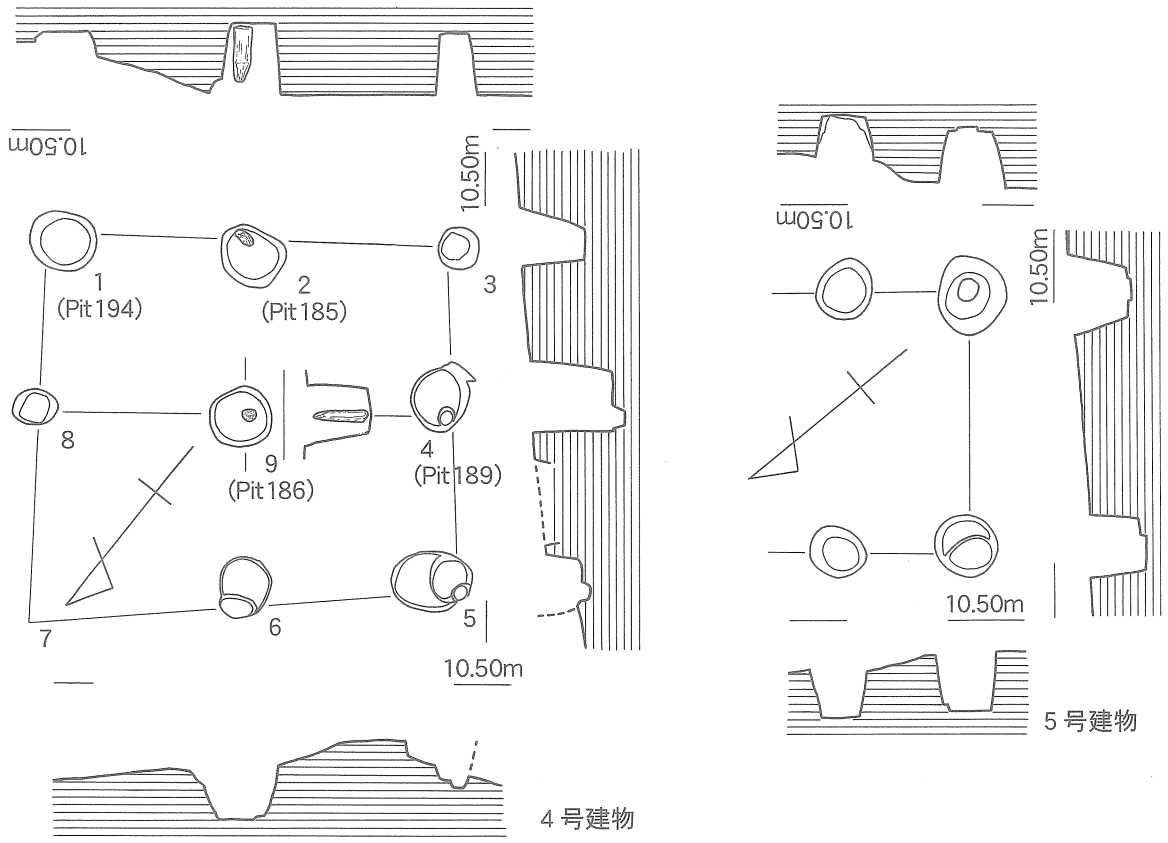
柱穴には底面に塊石を敷き詰めた付近の表土や包含層から鉄滓やふいごの羽口が出土したことから、製鉄に関連した遺構の検出が期待されたが、それと推定できる遺構を確認することはできなかった。

谷底では調査区を東西に横切る弥生時代後期以後とみられる溝を検出したが、掘り込まれた地盤が軟弱な青灰色粘土層で、調査中に遺構が崩壊する危険が生じたため、調査の安全に配慮して一部トレンチによる遺構の確認にとどめ、調査を終了した。

掘立柱建物

4号建物（図版16、第23図）

テラス面の北西隅で検出した建物で、古墳周溝を切る。北西部は削平斜面にかかっていたため北西隅の柱穴は確認することができなかった。現況では2間×2間の総柱建物で、主軸はN－52°－W。



第23図　2区堀立柱建物実測図（1／80）

梁行4.32m、桁行3.84m。柱掘方は円形ないしは楕円形で、径は60cm～70cm、深さは80cmほどになる。Pit185、Pit186では柱根部の材が遺存していた。

奈良時代前後の建物と推定される。

ちなみに柱根の放射性炭素年代測定をおこなったところ Pit185 では1380±490BP 、Pit186では1860±130BP との測定結果が報告された。

柱根（図版26、第26図）） 双方ともクスノキの蜜柑割り材を原材として加工している。上端は乾燥による収縮現象が観察される。底面には手斧による加工痕が明瞭に残る。

Pit185は残存長59.1cm。最下部の長径21.6cm、短径 14.8cm。断面は隅丸長方を呈する。

Pit186は残存長54.9cm。最圧径は残存部の上端にあり径11.7～18.6cmほどで、下部にむかってやや窄まる。断面隅丸方形ないしは長方形で、材の一部は樹芯にかかる。

５号建物（図版16、第23図）

１号建物と切り合うが、前後関係は判然としない。北部柱穴は削平されていて、建物の規模は確定しない。現状で桁行2.76mを測る。主軸はＮ－39°－Ｅであろうか。

溝

５号溝（第17図）

テラス面中央部で北東方向に向けて掘られた溝である。幅45cm、深さ10cmほどで、時期は不明である。

６号溝（第17図）

テラス面西端で西向きに掘られた溝である。幅38cm、深さ10cmほどで、時期は不明であるが、５号溝同様、近世以降の新しい時期の溝と考えられる。

７号溝（第17図）

テラス面北西端で古墳周溝を切って掘りこまれた溝である。斜面の傾斜変換線に並行している。時期は明らかではないが、水田関連の水路と推定され、近世以降の新しい時期の遺構と推定される。

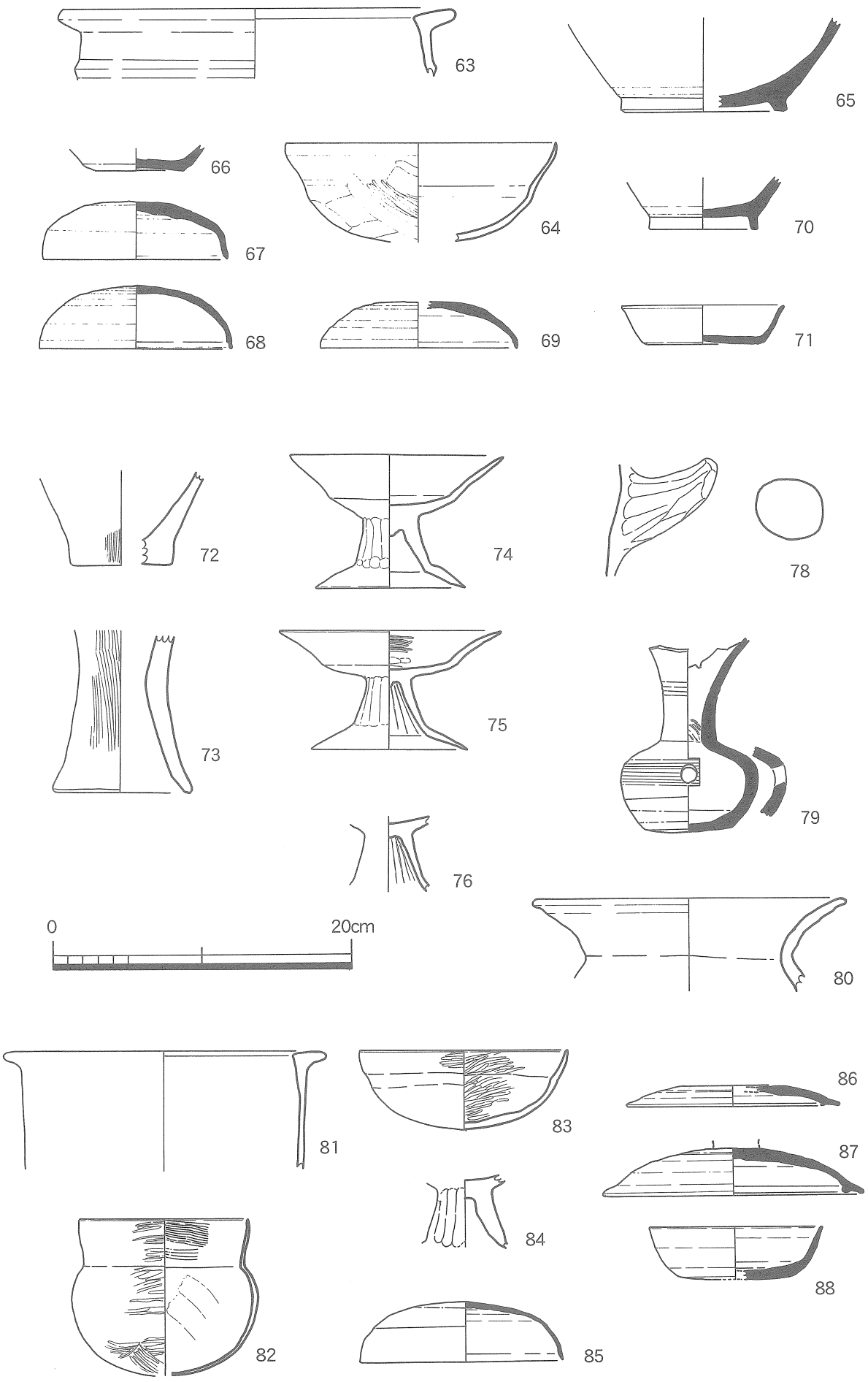
８号溝（図版８、第17図）

トレンチによる、土層断面観察のみを行なった。谷底に掘りこまれた断面逆台形の溝で、幅2.6 m、深さ50cm。２回以上の掘り直しが観察される。埋土中から、弥生中期～古墳時代後期の土器片とともに韓半島系瓦質土器、コップ型の土器などが出土した。

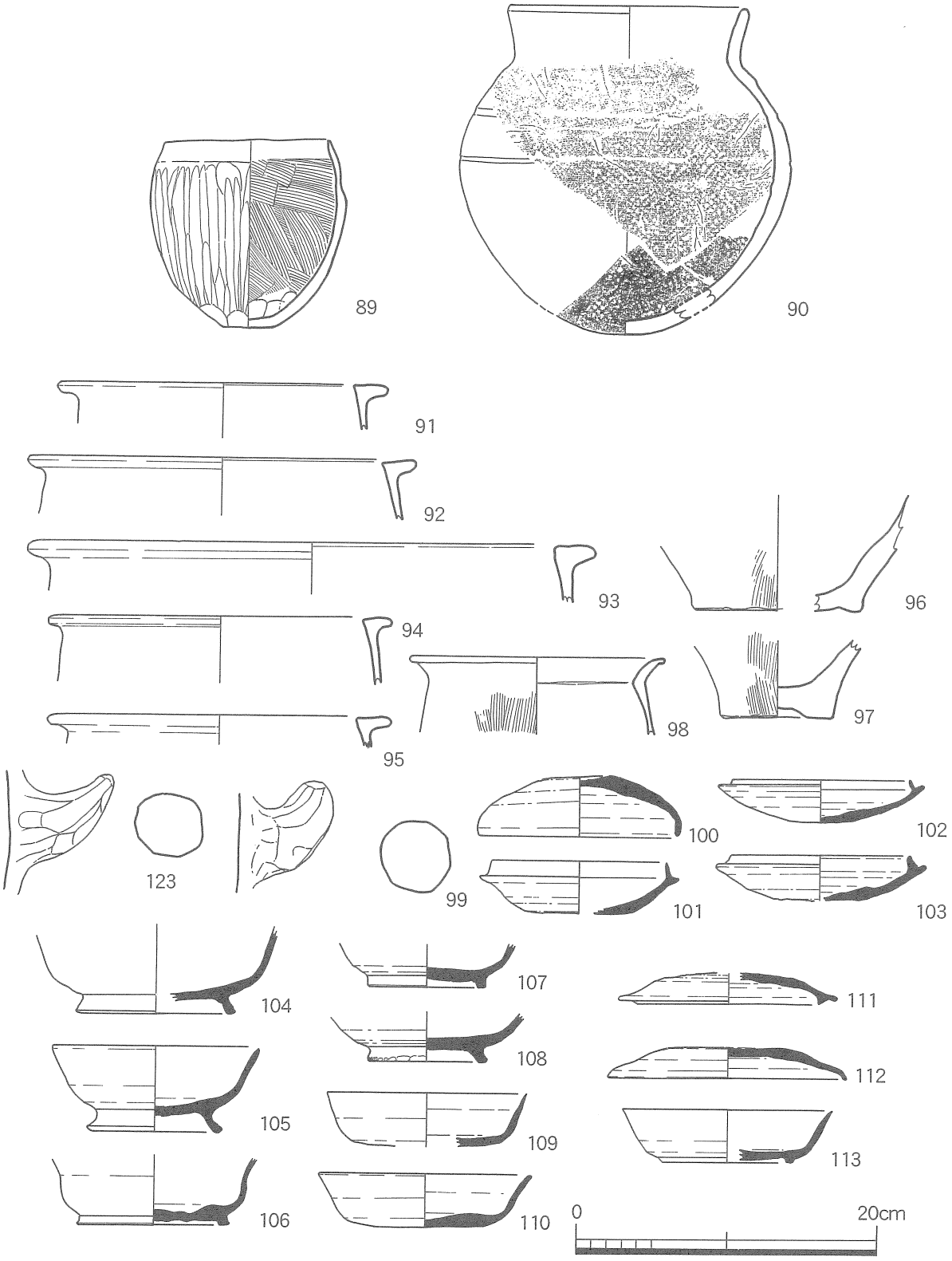
出土土器（図版24、第25図） 89は朝鮮半島系瓦質土器である。胴部は球形で、口頸部は直立し口唇部は丸くおさめる。胴外面には格子状のタタキが施され、肩部には２cmほどの間隔で二条の沈線がめぐる。内面は丁寧なナデ仕上げを行なう。器壁は厚い。90はコップ型の土器である。外形は砲弾形で、胴部最大径は9.7cmを計る。底部は小さな平底となる。表面は縦方向の研磨を行い、内面は細かいハケで、口唇部付近はヨコナデで仕上げる。

９号溝（第17図）

８号溝の西で検出された幅40cm、深さ10cmほどの小溝である。底から須恵器杯蓋（87）が出土している。



第24図　神在横畠遺跡遺構出土土器実測図（1／4）



第25図　神在横畠遺跡包含層等出土土器実測図（89.90は1／3.他は1／4）

その他の遺構、遺物

柱穴のなかには、Pit199（図版18－ｃ）、Pit197（図版18－ｄ）のように底に塊石を敷いて礎石とし、地盤の脆さを克服する努力の跡を垣間見せるものもあった。

また、一方、堀り方内に完形土器が納められている例が数例みられた。古墳時代中期以降のものが多く、Pit121、Pit163ではミニチュアの高杯が堀方上層の埋土中から出土し（第24図74、75）、Pit161では口縁を打ち欠いた須恵器瓹が出土しており（第24図79）、地鎮のための祭祀行為による可能性がある。

この他、包含層から弥生中・後期の土器片が散見されたが、当該時期の確実な遺構を検出することができなかった。これら弥生土器は一様に小片で、表面の摩滅が著しい。背後の宮地嶽の高所に弥生中期の集落が営まれていたことをうかがわせ、興味深い。

遺物番号	図版番号	挿図番号	器　種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎　土	色　調	焼成	備　考
1	19	12	須恵器　壺蓋	1号住居	－	12.7	－	石英,長石粒を多く含む	淡青灰色	堅緻	
2	19	12	須恵器　杯蓋	1号住居	2.85	8.8	－	石英粒を多く含む		堅緻	
3	19	12	須恵器　高杯	1号住居	－	－	7.6	精緻	青灰色	堅緻	
4		12	土師器　甕	1号住居	－	17.4	－	石英,長石粒を多く含む	淡褐色	良好	
5		12	土師器　甕	1号住居	－	－	－	石英,長石粒を多く含む	淡褐色	良好軟質	カマド底面出土
6	19	12	土師器　鉢	1号住居		12.4	－	石英,長石粒を多く含む	淡赤褐色		
7		12	土師器　壺	1号住居	－	－	－	石英,長石粒を多く含む	赤褐色	軟質	
8		12	土師器　甕	1号住居	－	－	－	石英,長石粒を多く含む	黄褐色	良好	カマド底面出土
9	19	12	土師器　甕	1号住居	－	16.8	－	石英,長石粒を多く含む	暗茶褐色	良好	
10		12	土製土錘	1号住居	－	－	－	石英,長石粒を多く含む	白黄色		全長7.2cm
63		24	弥生土器　甕	横畠古墳周構	－	26.2	－	石英,長石粒を多く含む	黄褐色	良好	
64		24	土師器　鉢	横畠古墳周構	6.7	18.2	－	長石粒を多く含む	赤褐色	良好	
65		24	須恵器　壺	横畠古墳周構	－	－	11.2	石英,長石粒を多く含む	青灰色	堅緻	
66		24	土師器　杯身	横畠古墳周構	－	－	6.0	精緻	淡褐色	良好	
67	24	24	須恵器　杯蓋	横畠古墳周構	4.0	12.3	－	石英,長石粒を多く含む	青灰色	良好	
68	24	24	須恵器　杯蓋	横畠古墳周構	4.4	13.0	－	精緻	明青灰色	堅緻	
69		24	須恵器　杯蓋	横畠古墳周構	－	－	－	精良	淡青灰色	堅緻	
70		24	須恵器　壺	横畠古墳周構	－	－	7.3		明褐色	良好	
71	24	24	須恵器　杯身	横畠古墳周構	2.7	10.7	2.7	精緻	淡赤褐色	堅緻	
72		24	弥生土器　甕	Pit194	－	－	6.9	石英,長石粒を多く含む	明褐色	良好	
73		24	弥生土器　器台	Pit191	－	－	9.2	石英,長石粒を多く含む	黄褐色	良好	
74	26	24	土師器　高杯	Pit163	9.0	14.0	10.0	石英粒を多く含む	赤褐色	良好	ミニチュア土器,供献埋納品
75	26	24	土師器　高杯	Pit121	8.0	14.5	10.3	精緻	赤褐色	良好	ミニチュア土器,供献埋納品
76	24	24	土師器　高杯	Pit69	－	－	－	精緻	淡赤褐色	良好	
77	24		須恵器　瓹	Pit			－		青灰色	堅緻	
78		24	土師器　甕	Pit121	－	－	－	石英,長石粒を多く含む	淡黄褐色	良好	
79		24	須恵器　瓹	Pit161	－	－	7.0	長石粒を多く含む	灰黒色	堅緻	口縁打ち欠き,埋納品
80	26	24	土師器　甕	Pit162	－	20.9	－	石英,長石粒を多く含む	明黄褐色	良好	

第２表　神在横畠遺跡出土土器観察表①

遺物番号	図版番号	挿図番号	器　種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎　土	色　調	焼成	備　考
81		24	弥生土器　甕	4号溝	−	21.6	−	小砂粒を多く含む	白黄褐色	良好	
82	25	24	土師器　壺	4号溝	10.5	11.2	−	精良	赤褐色	良好	
83	25	24	土師器　鉢	4号溝	5.4	13.7	−	石英,長石粒を多く含む	赤褐色	良好	
84	24	24	土師器　高杯	4号溝	−	−	−	小砂粒を多く含む	明赤褐色	良好	
85	19	24	須恵器　杯蓋	4号溝	4.1	13.6	−	小砂粒を多く含む	灰黄色	軟質	底面出土
86	19	24	須恵器　杯蓋	9号溝	−	14.6	−	精緻	青灰色	堅緻	
87		24	須恵器　杯蓋	9号溝	3.2	17.2	−	石英,長石粒を多く含む	白黄色	良好	
88		24	須恵器　杯身	9号溝	3.6	11.6	−	石英粒を多く含む	青灰色	やや軟質	
89	24	25	弥生土器	10号溝	9.3	8.0	2.0	精緻	茶褐色	やや軟質	外面タテ研磨,口縁ヨコナデ
90	24	25	瓦質土器　壺	10号溝	16.2	11.5	−	精緻	灰色	軟質	外面格子タタキ,内面ナデ消し
91		25	弥生土器　甕	10号溝	−	−	−	石英,長石粒を多く含む	淡褐色	良好	
92		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	25.8	−	石英,長石粒を多く含む	淡黄褐色	良好	
93		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	37.6	−	石英,長石粒を多く含む	淡黄褐色	良好	
94		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	−	−	石英,長石粒を多く含む	淡赤褐色	良好	
95		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	22.7	−	石英,長石粒を多く含む	淡赤褐色	良好	
96		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	−	10.8	石英,長石粒を多く含む	白黄褐色	良好	
97		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	−	7.2	石英,長石粒を多く含む	明褐色	良好	
98		25	弥生土器　甕	10号溝上層	−	16.9	−	精良	淡褐色	良好	
99		25	土師器　甕	10号溝上層	−	−	−	石英,長石粒を多く含む	淡黄褐色	良好	把手のみ
100	25	25	須恵器　杯蓋	10号溝上層	3.8	13.0	−	石英,長石粒を多く含む	淡青灰色	良好	
101	25	25	須恵器　杯蓋	10号溝上層	3.5	11.5	−	石英,長石粒を多く含む	青灰色	堅緻	
102		25	須恵器　杯身	10号溝上層	2.8	11.7	11.7	精緻	青灰色	堅緻	
103		25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	11.8	−	精緻	淡青灰色	堅緻	
104	25	25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	−	−	精緻	淡青灰色	堅緻	
105	25	25	須恵器　杯身	10号溝上層	5.7	13.6	−	精緻	淡青灰色	良好	
106		25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	−	10.2	精緻	淡青灰色	良好	
107		25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	−	7.9	精緻	青灰色	堅緻	
108		25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	−	8.0	精緻	青灰色	堅緻	
109		25	須恵器　杯身	10号溝上層	−	13.3	−	長石粒を多く含む	白灰色	良好軟質	
110		25	須恵器　杯身	10号溝上層	3.6	14.1	7.2	石英,長石粒を多く含む	暗青灰色	堅緻	
111		25	須恵器　杯蓋	10号溝上層	−	12.0		精緻	暗青灰色	堅緻	
112		25	須恵器　杯蓋	10号溝上層	2.1	15.6		石英,長石粒を多く含む	淡青灰色	堅緻	
113		25	須恵器　杯身	整地土層	3.6	13.9	−	石英,長石粒を多く含む	淡青灰色	堅緻	
114	19		土師器　甑	−	−	−	−	精良	黄褐色	良好	
115	26		土師器　甕	Pit162	−	−	−	精良	淡赤褐色	良好	
116	25		土師器　甕	−	−	−	−	長石粒を多く含む	赤褐色	良好	
117	25		土師器　壺	2号土壙	−	−	−	精緻	赤褐色	良好	
120	24		土師器　壺	横畠古墳周溝	−	−	−	長石粒を多く含む	赤褐色	良好	

第3表　神在横畠遺跡出土土器観察表②

3．自然科学分析の記録

神在横畠遺跡出土遺物放射性炭素年代測定及び樹種同定業務報告

平成10年３月

財団法人　九州環境管理協会

（1）はじめに

本報告は前原市の委託を受けて財団法人九州環境管理協会が「神在横畠遺跡出土遺物放射性炭素年代測定および樹種測定業務」について取りまとめたものである。

（2）分析試料

分析試料を第４表に示す。

第４表　^{14}C年代測定、樹種同定試料一覧表

	試料番号	採取地点	採取年月日	採取者	遺構等の記号番号	項　目
1	①	福岡県前原市 大字神在字横畠 神在横畠遺跡	1997年12月22日	野田純子	Pit185	年代鑑定 樹種同定
2	②		1997年12月22日		Pit186	
3	③		1997年10月15日		Pit178	年代鑑定

（3）分析方法

^{14}C年代測定は、液体シンチレーション計測法で測定した。

（4）測定結果

^{14}C年代測定の結果を第５表に示す。

第５表　^{14}C年代測定結果

		試料番号	試料名	遺構等の記号・番号	^{14}C年代／yearsBP
1	KEEA-301	①	木製柱	Pit185	1380±490 (1420±500)
2	KEEA-302	②	木製柱	Pit186	1860±130 (1920±140)
3	KEEA-303	③	木製柱	Pit178	1720± 90 (1770± 90)

（5）樹種同定結果

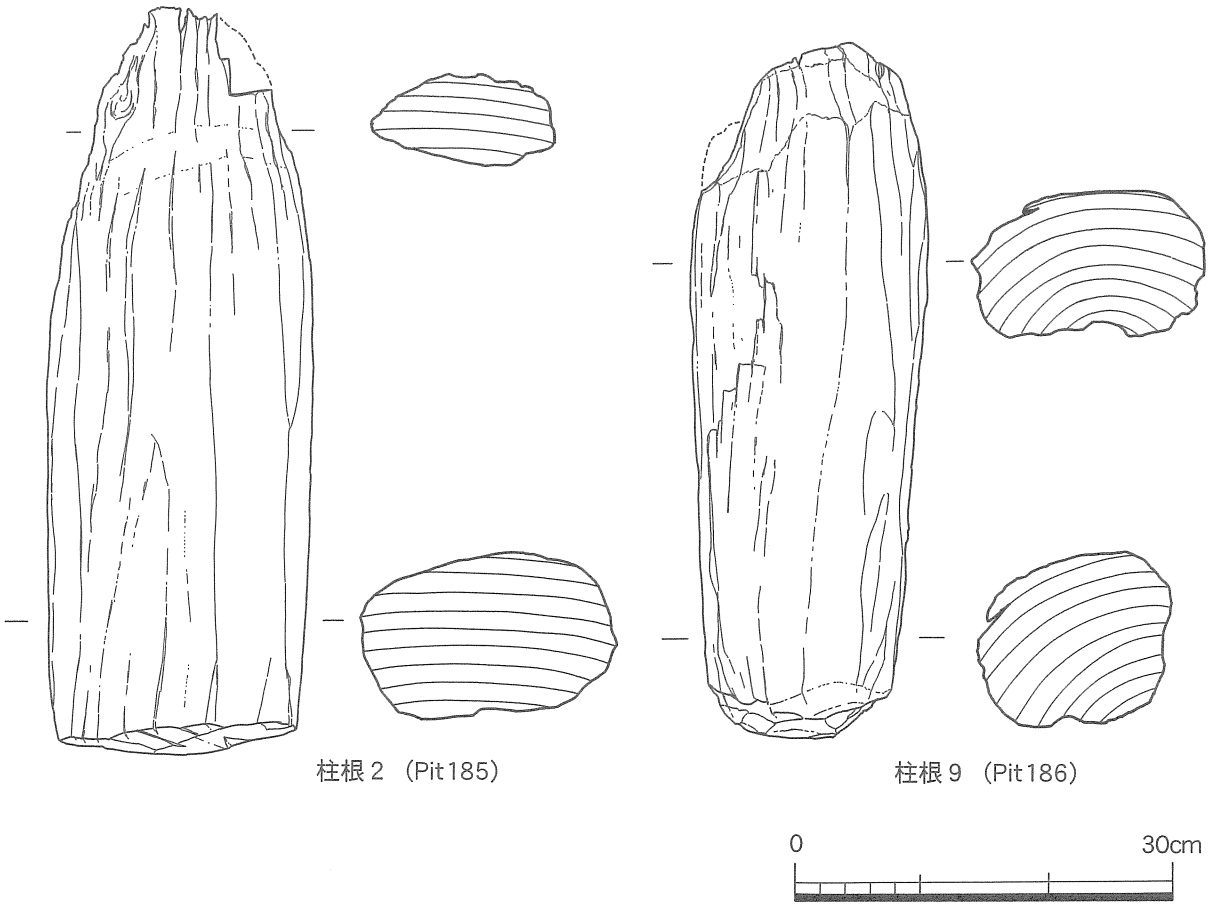
1）①（前原市神在横畠遺跡）
クスノキ（Cinnamoun camphora）

2）②（前原市神在横畠遺跡）
クスノキ（Cinnamoun camphora）

備　考

測定結果は^{14}C年代測定で慣例となっているLibbyの半減期5568年を採用し、西暦1950年までの経過年（yearsBP）で表示しております。また（）内の年代は^{14}C年の半減期として現在使用されている最新の値、5730年を採用し算出された値です。年代誤差は放射壊変の統計誤差（1）から換算された値であり、測定結果が約70％の確率でこの範囲にあることを意味します。なお、同位体効果の補正は行なっておりません。

^{14}C年代は必ずしも暦と一致するとは限りませんのでご注意下さい。



第26図　４号建物柱根実測図（1／6）

4．糸島地方の埴輪資料補遺

（1）釜塚古墳出土埴輪について

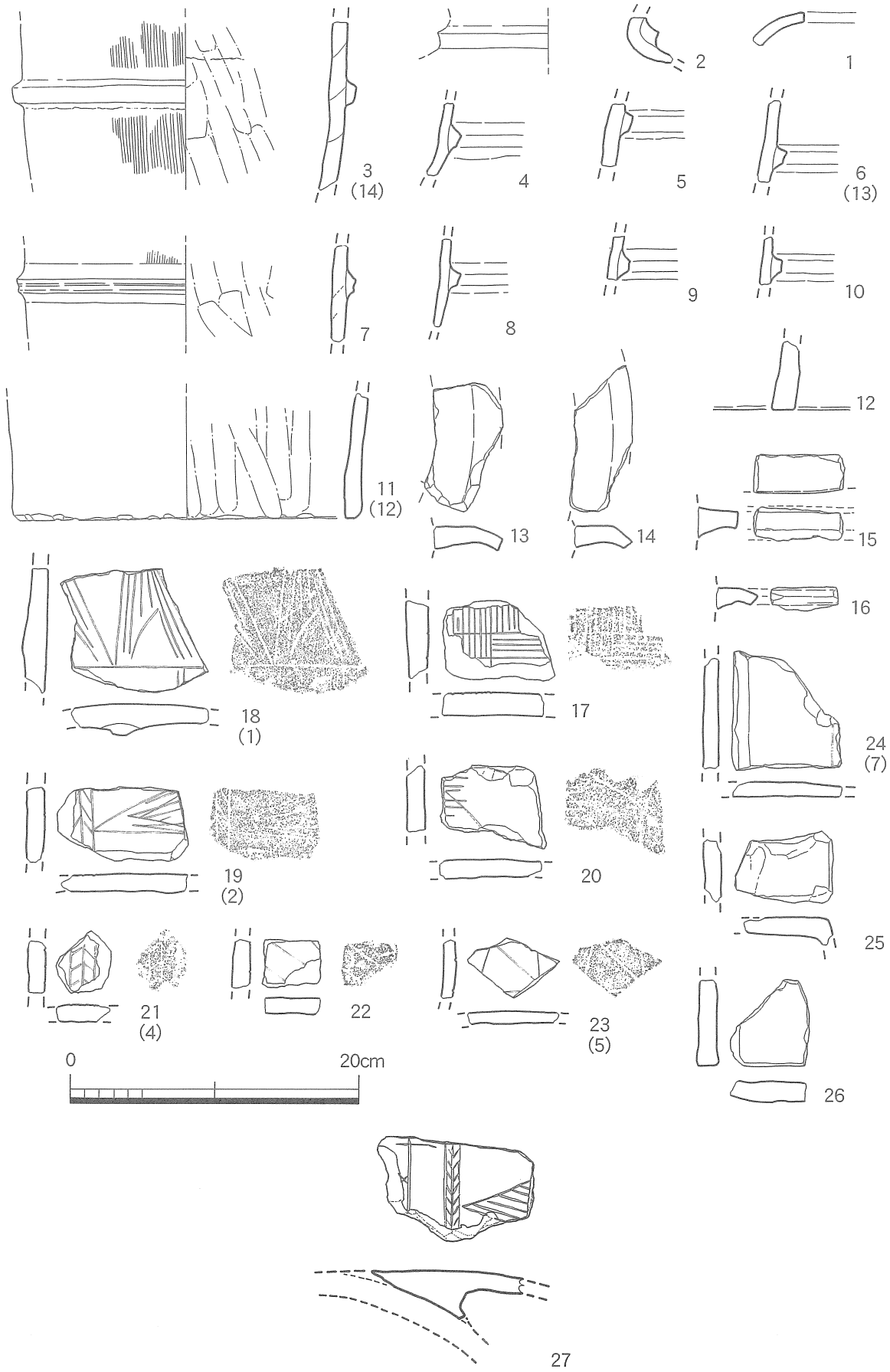
岸本　圭（福岡県教育委員会 文化財保護課）

釜塚古墳からは1980年の調査時に墳丘からパンケース約１箱分の埴輪が採集されている。これらは既に報告されているが（石山1981）、隣接する神在横畠古墳から埴輪が出土したことから比較検討の必要があると考え、今回改めて紹介する次第である。なお、図の括弧中の番号は報告書挿図中の資料番号に符号する。

器壁が摩滅した小片が多く図化できるものは少なかったが、円筒埴輪12点、形象埴輪15点を第26図に示す。胎土には１～２mm大の石英・長石粒を多く含み、色調は淡赤褐色を呈する。胎土・色調の特徴は円筒埴輪・形象埴輪に共通する。黒斑を残しており、窖窯焼成によらないと考えられる。１は口縁部で、大きく外反する特徴から朝顔形埴輪の可能性が高い。２は朝顔形埴輪の頸部で、くびれ部に断面三角形の突帯をめぐらせる。３～10は円筒埴輪の胴部。胴部の最大径（復元）は３・７ともに22.3cmである。器壁の厚さは約１mmと薄手で、底部付近でも厚くならない。外面調整は縦ハケにより、二次調整の横ハケは認められない。内面調整は縦あるいは斜め方向のナデである。突帯部は横ナデが施されるが、下面は調整が粗雑となり接合痕を顕著に残すものがある（３・５）。突帯は断面台形を呈するものが多く、シャープなつくりのものと、やや丸味を帯びるものの二者がある。７は断面M字形である。突帯の上面幅は８～10mm、基底幅は約20mm、高さは約７mmを測る。11・12は底部で、11の底径は24.2cmで、底面には径３～５mmの棒状圧痕を多数残す。12の端部外面は横ナデが施されるように観察される。

13～26は形象埴輪であるが、小片のために器種の判断が困難なものが多い。いずれも厚さは13～15mmを測り、23・24が約10mmとやや薄手である。摩滅のために観察し難いが器面調整はいずれもなでによるとみられる。13～16は高い突帯状を呈し、15以外は先端部を屈曲させる。家形埴輪の一部であろうか。17は網代表現が施され、家形埴輪と考えられる。18～21は三角文・綾杉文が施され、盾形埴輪かと考えられる。22、23にも疎らな沈線表現があり、盾形埴輪かと考えられる。24～26は平面状、あるいは平面が複数組み合わさるもので、器種は不明である。

断片的なこれらの資料を神在横畠古墳出土埴輪と比較するにはやや無理があるが、有黒斑であることや透孔・突帯の形状、胴部・底部の径等から判断して類似度が高い点が指摘できよう。比較の対象を糸島平野とその周辺の資料に拡大すれば、まず、福岡市西区鋤崎古墳や丸隈山古墳、志摩町の井田原開古墳の円筒埴輪とは透孔の形状、すなわち、これらには三角・半円といった円形以外のものが含まれることが相違点として挙げられる。また前原市銭瓶塚古墳の円筒埴輪には黒斑がない点が大きい。全国的な円筒埴編年を組み立てた川西宏幸氏（1978）や、九州の円筒埴輪を詳細に検討した高橋徹氏・大西智和氏（高橋1992、大西1992）の研究成果をみれば、透孔は「円形以外→円筒」、黒斑の有無は「有黒斑→無黒斑」という変遷が考えられている。したがって透孔の形状から鋤崎、丸隈山・井田原開→神在横畠・釜塚、また黒斑の有無から神在横畠・釜塚→銭瓶塚という変遷が考えられる。また、鋤崎・丸隈山・井田原開には基底部に半円形の透孔を有するが、神在横



第27図　釜塚古墳出土埴輪実測図（1／4）

畠には認められず、編年基準として有用と考えられる。また、川西編年では当該期に関して二次調整ハケの有無やその手法が編年基準として大きなウエイトを占めるが、本地域では縦ハケしか認められない点は大きな特色である。

北部九州においては有黒斑段階の資料は少なく編年の組み立てが困難な状況であったが、その変遷が追える地域として本地域は貴重であり、今回の神在横畠古墳の資料が加わったことは研究の進展に貢献することと思われる。

参考・引用文献

大西智和　「円筒埴輪の編年」『人類史研究』第８号　1992　鹿児島大学

岡部裕俊　河村裕一郎　「糸島地方の古墳資料集成（その１）」『福岡考古』第16号　1994　福岡考古懇話会

川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』　第64巻第２号　1978

高橋徹　「埴輪の種類と編年　九州」『古墳時代の研究』９　1992　雄山閣

鍋島さとみ　『曽根遺跡群Ⅲ』前原町文化財報告書第14集　1984　前原町教育委員会

林　覚　『曽根遺跡群Ⅳ』前原町文化財報告書第27集　1988　前原町教育委員会

石山勲　『釜塚』　前原町文化財報告書第４集　1981　　前原町教育委員会

柳沢一男　『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集　1984　福岡市教育委員会

柳沢一男　『丸隈山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集　1986　福岡市教育委員会

（２）糸島高郷土博物館所蔵の釜塚古墳出土埴輪片について

糸島高校郷土博物館に、「釜塚」と注記された埴輪片が数点展示されている。釜塚古墳で採集された資料と推定される。そのなかの一点に形象埴輪片とみられる資料があり、高校のご好意で実測の機会をいただいたので紹介する。

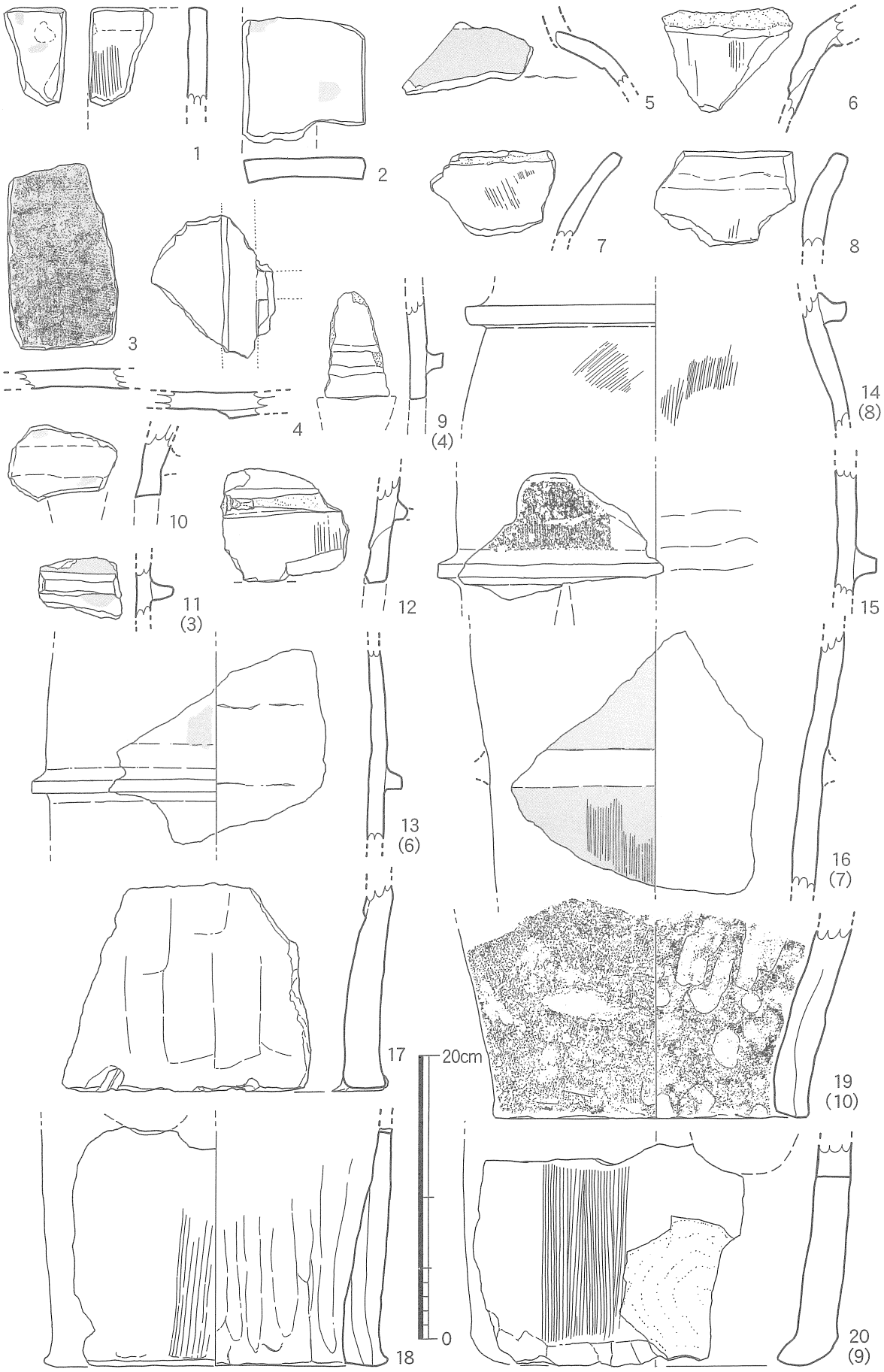
資料は長さ11cm、幅6.7cm の粘土板の表面に横倒しの三角文－綾杉文－縦方向の沈線がならび、端部に×印状に沈線がのぞく。この×印は三角文の一部であろうか。裏面には接合痕跡が明瞭に残っていて、円筒埴輪への接合痕とみられ、このことから楯形埴輪の一部と考える。資料の上下は定かでないが、盾表現の側付近とみられる。

前項で同種資料が岸本氏によって紹介されており、盾形の一部と推定されているが、この見解を補足する資料である。

（３）井田原開古墳出土埴輪について

志摩町大字井田原字開に所在する開古墳は、墳丘全長95mほどに復元される糸島地方第二の規模を有する前方後円墳である。古墳の現状、および出土資料の一部は以前に紹介したが、その後、福岡市博物館収蔵の埴輪資料について新たに実測する機会を得たので、前出資料とあわせて紹介する。15、17は志摩町所有資料である。（図の括弧中の番号は前掲資料紹介中の資料番号に符号する。）

埴輪片は概して表面の劣化剥落が著しいが、突帯などは本来はより縁辺がよりシャープだったと



第28図　井田原開古墳出土埴輪実測図（1／4）

考えられる。全体的に厚手の印象を受ける。黒斑があり野焼き焼成であるとみられる。

器面調整は表面では最終調整として採タテハケ調整ないしはナナメハケが行なわれており、内面は縦方向のハケ、ナデにより調整を終えている。

確認できた埴輪片77片中、形象埴輪とみられるものは７片。そのうち３片を図示した。小片のため、本来の形状はわからないが、盾ないしは家形の一部である可能性がある。

１～４は厚さ1.4cmの板状の形象埴輪片である。１はコーナーが残る。４は厚さ0.6cmの突帯がＴ時形に貼り付けられている。

残る70片のうち、明らかに朝顔形埴輪といえる二片をのぞくと他は埴輪の円筒部である。概して突帯は、その高さが器壁の厚さにほぼ等しい。

５、６は朝顔形埴輪片である。５は肩部で表面に朱の塗布が認められる。６は疑口縁下片であろう。７、８は円筒埴輪の口縁部である。７は薄手で端部が大きく外反するのに対し、８は厚手で端部は短く外反する。９～16は胴部片である。９、10では突帯下に上辺が直線的に切り込まれた多角形の透孔が認められるのに対し、最下段の透孔は下辺が弧状を呈していることから円形ないしは半円形とみられる。17～20は底部である。17、18、19では、裾が顕著に外側に張り出し、20は内側に湾曲したままである。

１、４では表面に赤色顔料が認められることから、形象埴輪、朝顔形埴輪の一部には朱彩が行なわれていたことは確実である。

当古墳出土埴輪の留意点として、まず、有黒斑埴輪であることがあげられる。透孔には円形以外に台形ないしは三角形などの多角形孔があり、最下段にも透孔が設けられていることが注意される。横畠古墳の埴輪とは十分比較に耐えうる資料ではないが、透孔の特徴からはやや先行する要素が認められる。

参考・引用文献

原田大六監修　『志摩町遺跡分布地図』　1973年　志摩町教育委員会

柳田康雄　「糸島地方の古墳文化」『三雲遺跡』Ⅲ　1982　福岡県文化財調査報告書第64集　福岡県教育委員会

岡部裕俊　河村裕一郎　「糸島地方の古墳資料集成（その１）」『福岡考古』第16号　1994　福岡考古懇話会

Ⅲ. まとめ

集落

調査地点から出土した土器は弥生中期から奈良時代までおよぶ。出土した弥生中期の土器は資料の摩滅が著しく、また確実な同時期の遺構も確認できなかったことから、上方からの流れ込み品である可能性が高い。周辺の尾根筋などに当該期の遺構が立地するものと推察される。

遺構として6世紀後半から奈良時代にかけての竪穴住居、掘立柱建物、柱穴などを検出したが、集落の範囲、性格、変遷など詳細を明らかにするまでにはいたらなかった。周辺における調査成果の蓄積を待ちたい。

横畠古墳

新たに発見された横畠古墳は直径23mほどの円墳と推定される。墳丘は削平され、わずかに周溝の一部が遺存するにとどまるが、埋土から埴輪が出土し、被葬者が糸島地方の首長系列に関わる有力層であったことをうかがわせる。

古墳は釜塚古墳の北東、約50mの位置にある。釜塚が長野川の河口、古加布里湾に面しているのに対し、横畠古墳は尾根筋からはずれて谷間のやや奥まった地点に立地すること、墳丘規模にも著しい格差があることから、釜塚に対し従的な位置に立地すると考える。

出土した円筒、朝顔形埴輪は概して外面調整が縦ハケで終了している。また、有黒斑であることから野焼き焼成である。岸本氏の指摘するように透孔は最下段に設けられたものは確認できず、2段目より上位に施された可能性が高い。これらの特徴を糸島地方で確認された埴輪資料と比較してみると（第6表）、現状では鋤崎、丸隈山よりも後出的で兜塚よりも先行することを確認できる。

釜塚と比較してみると釜塚では盾形、家形などの形象埴輪を伴うのに対し、横畠古墳では円筒、朝顔形埴輪だけで構成されていることからも両古墳の埴輪の構成に違いがあることは確認できるものの、相互の関係については明確な回答を導き出すにはいたらなかった。これについては、釜塚で将来行なわれるであろう調査の進展を待たなければならないだろう。

古墳名	墳形	埴輪の種類						黒斑	最下段透孔	透し孔形状	備考
		壺	円筒	朝顔	器財	家	人、動物				
一貴山銚子塚	前方後円	△									竪穴式石室　三角縁神獣、後漢鏡
三雲築山	前方後円	○	○					○			壺形は焼成前穿孔
元岡池ノ浦	前方後円		○	○				○		円　三角	
鋤崎	前方後円		○	○	○	○		○	○	半円　三角	鰭付円筒埴輪、丹塗りあり、埴輪転用棺　古式横穴式石室
丸隈山	前方後円		○	○	○	○		○	○	半円　三角	盾、水鳥形埴輪、丹塗り　古式横穴式石室
井田原開	前方後円		○	○	△	△		○	○	半円？三角	丹塗りあり、内行花文鏡
釜塚	円		○	○	○			○			古式横穴式石室
横畠	円		○	○				○	×	円	
兜塚(飯氏A1号)	前方後円		○	○				×	×	円	古式横穴式石室
ワレ塚	前方後円		○					×		円	陶質土器？　横穴式石室？
銭瓶塚	前方後円		○	○		△	△	×	×	円	家形埴輪、帆立貝形古墳
今宿大塚	前方後円		○			○	○	×		円	武装人物、馬形埴輪・横穴式石室

第6表　糸島地方の埴輪出土古墳一覧（確認分のみ）

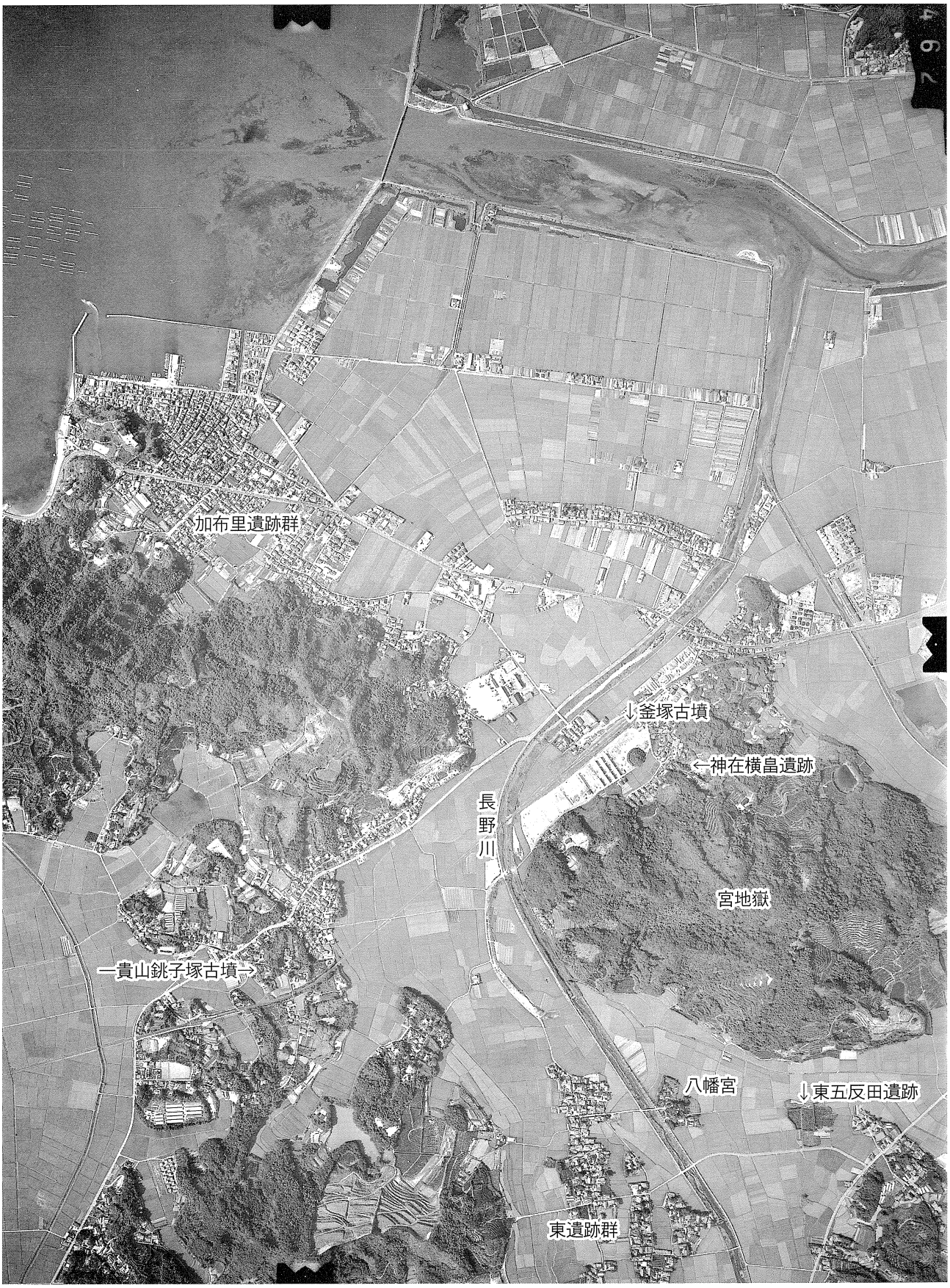
報告書抄録

ふりがな	かみあり　よこばたけ　いせき
書名	神在横畠遺跡
副書名	福岡県前原市大字神在字横畠所在遺跡の調査報告
巻次	
シリーズ名	前原市文化財報告書
シリーズ番号	第71集
編集者名	野田純子
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1192　福岡県前原市大字前原623番地　TEL (092) 323-1111
発行年月日	西暦2000年3月31日

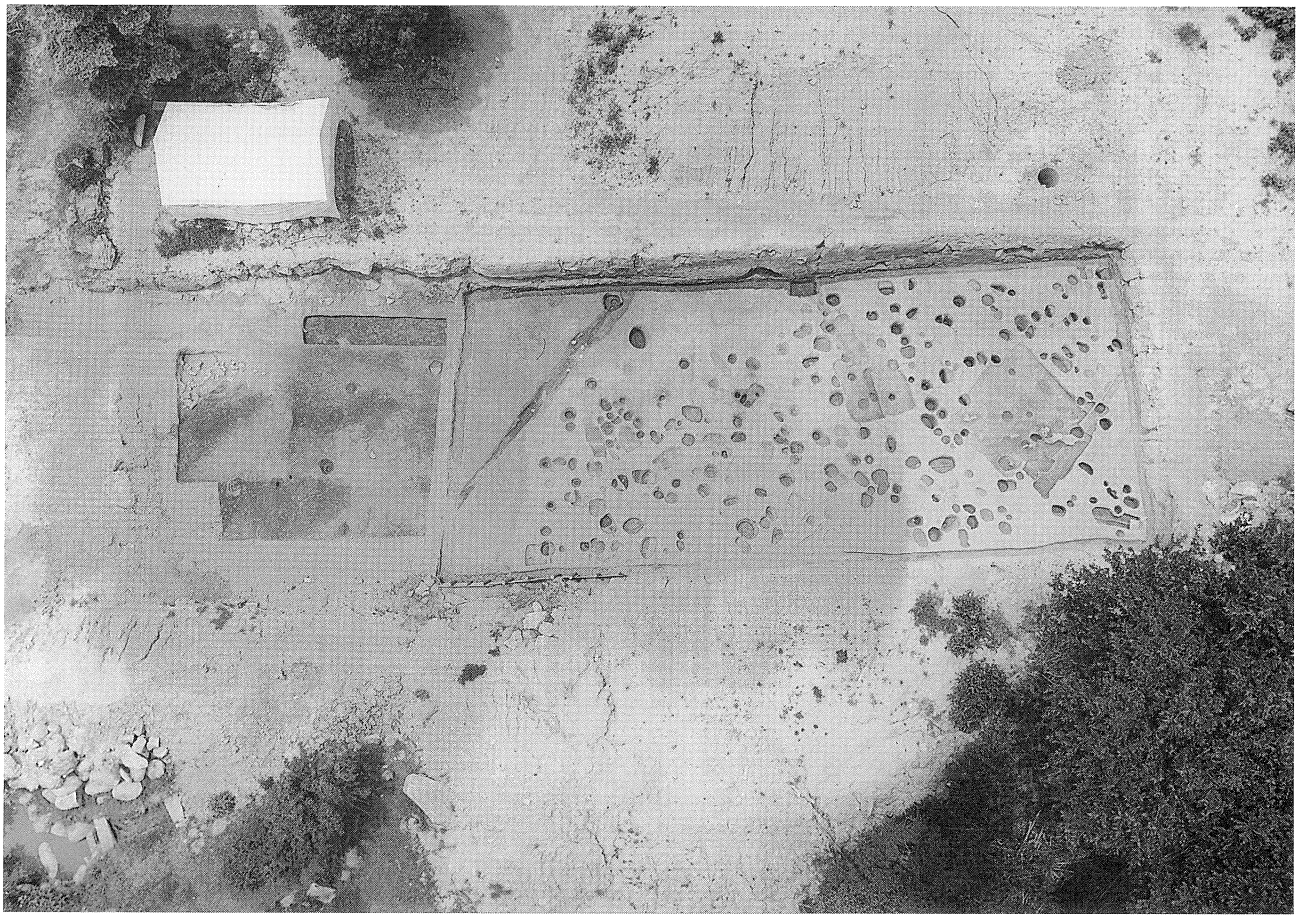
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみありよこばたけ 神在横畠 遺跡	ふくおかけん 福岡県 まえばるし 前原市 おおあざかみあり 大字神在 あざよこばたけ 字横畠	40222		33° 35′ 32″	130° 35′ 32″	1997.02.17 ～ 1997.11.30	対象面積 4,500㎡ うち 調査面積 900㎡	高層住宅建設計画に伴う建設予定地点の緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かみありよこばたけ 神在横畠 遺跡	墳墓 および 集落	弥生 古墳 奈良	横畠古墳　1 竪穴住居　2 掘立柱建物　5 溝　10	円筒埴輪 朝顔形埴輪 弥生土器 半島系瓦質土器 須恵器 土錘 柱根	

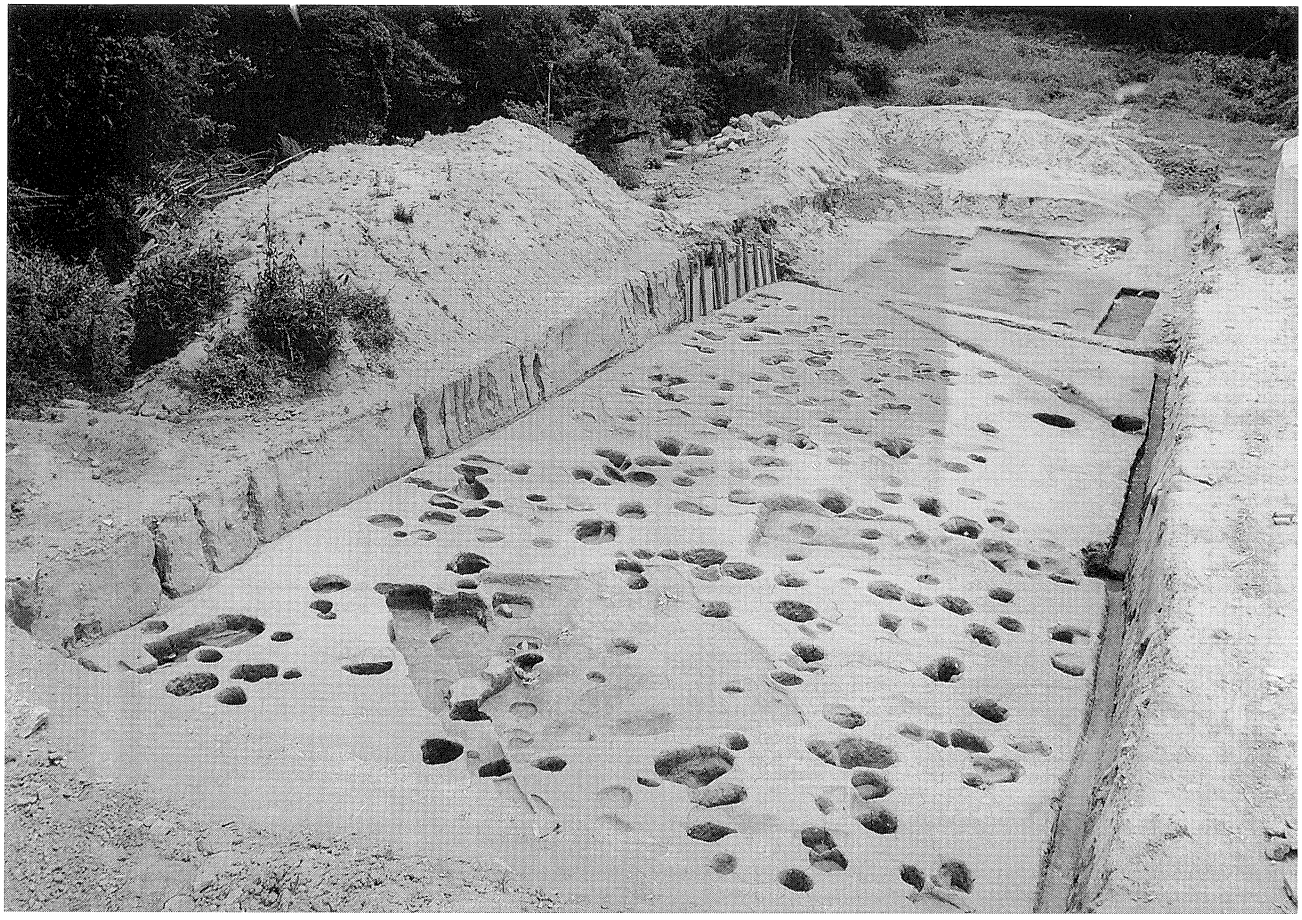
図　版



神在横畠遺跡周辺航空写真（1974年頃 アジア建設コンサルタント撮影）

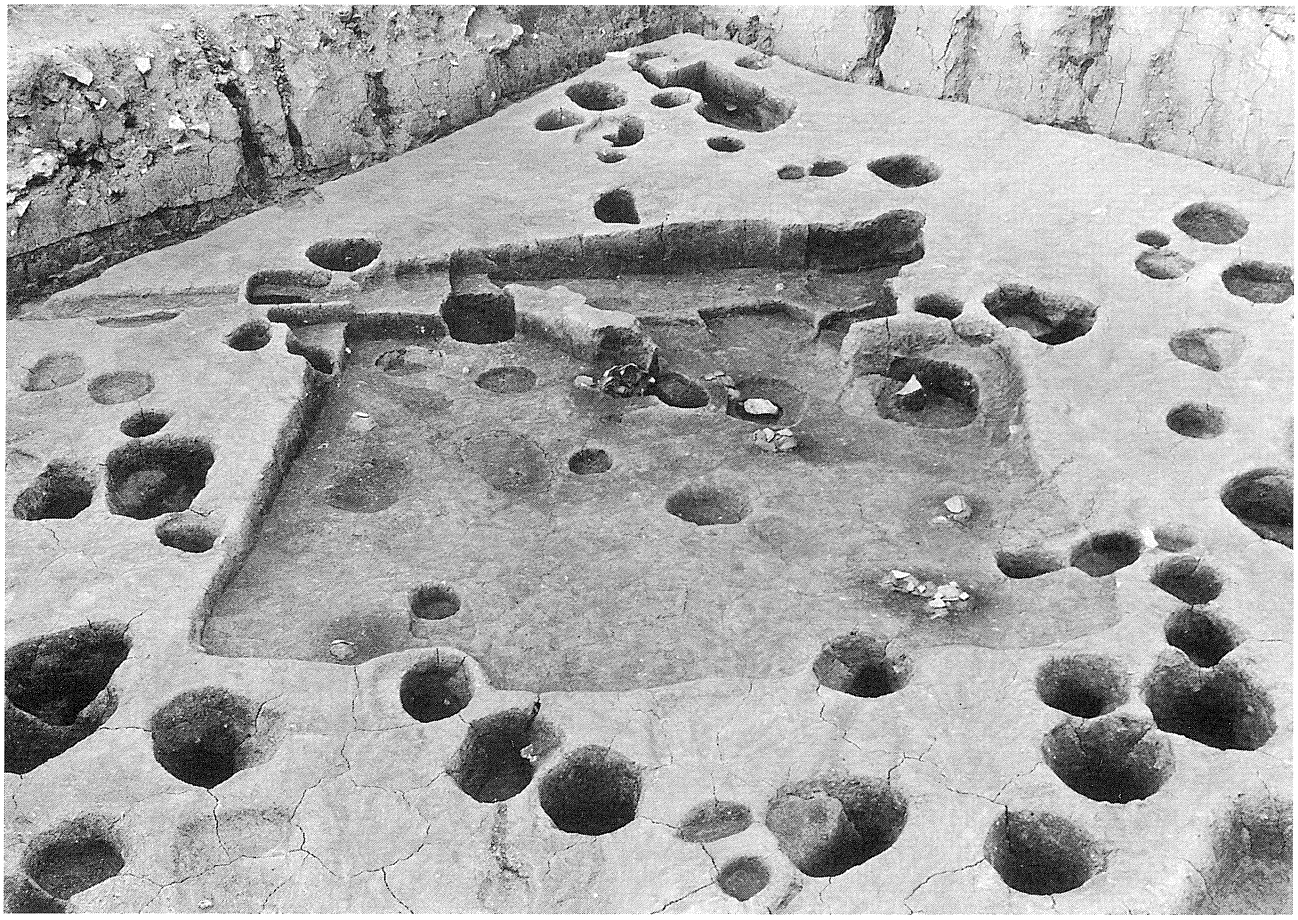


a　１区全景（真上から）

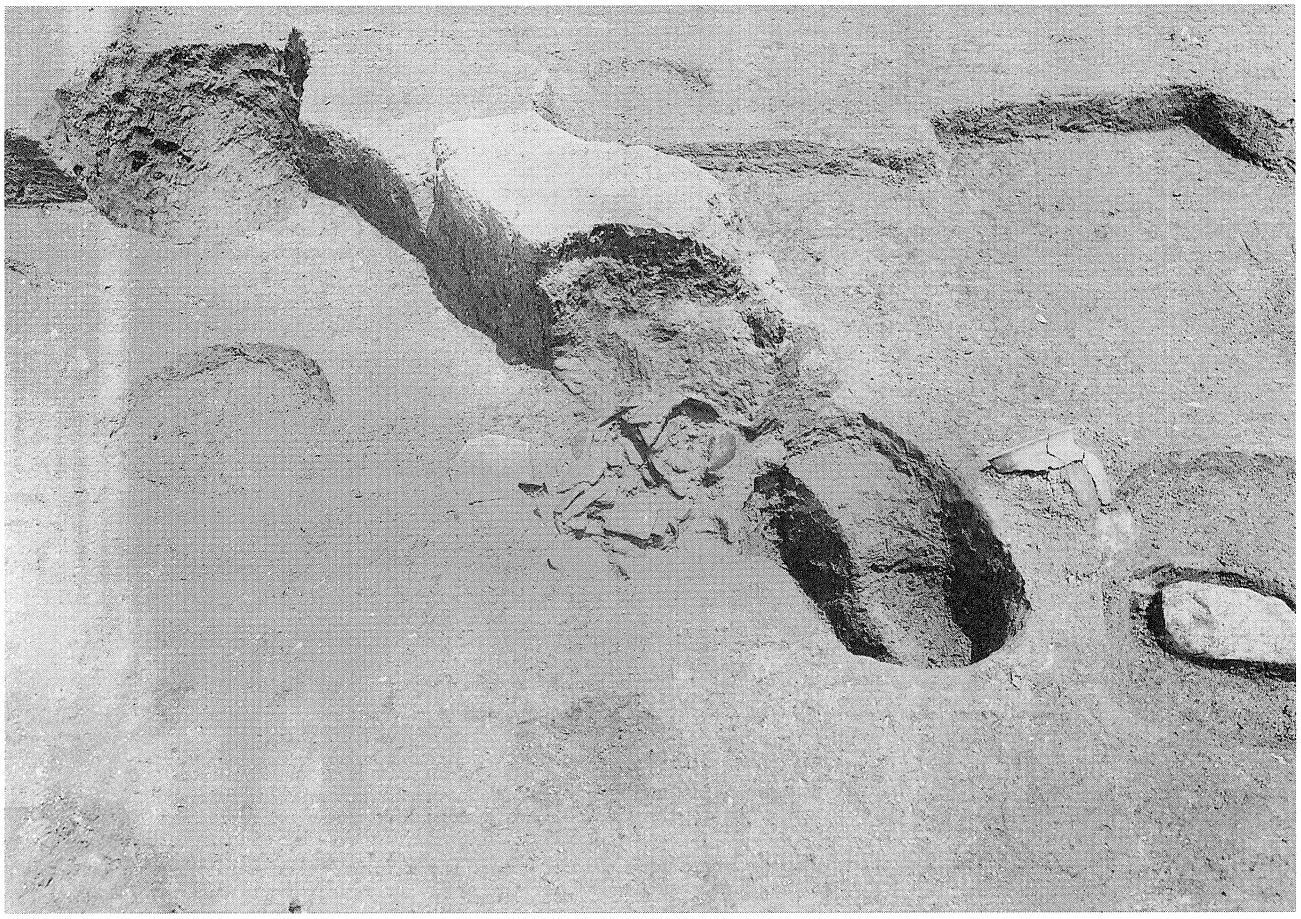


b　同上（北西から）

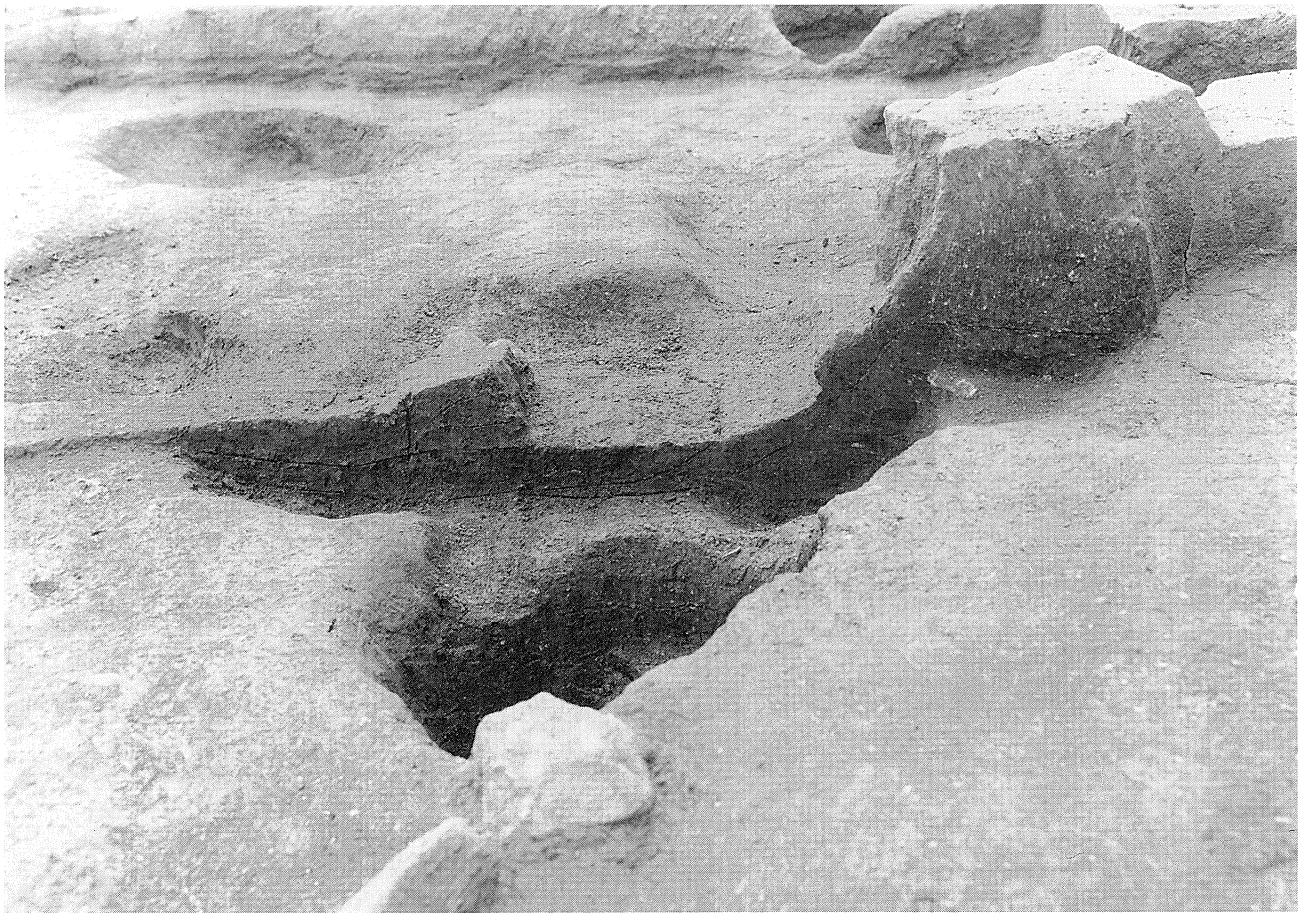
a　１区北東部近景（南西から）



b　１号住居全景（南西から）



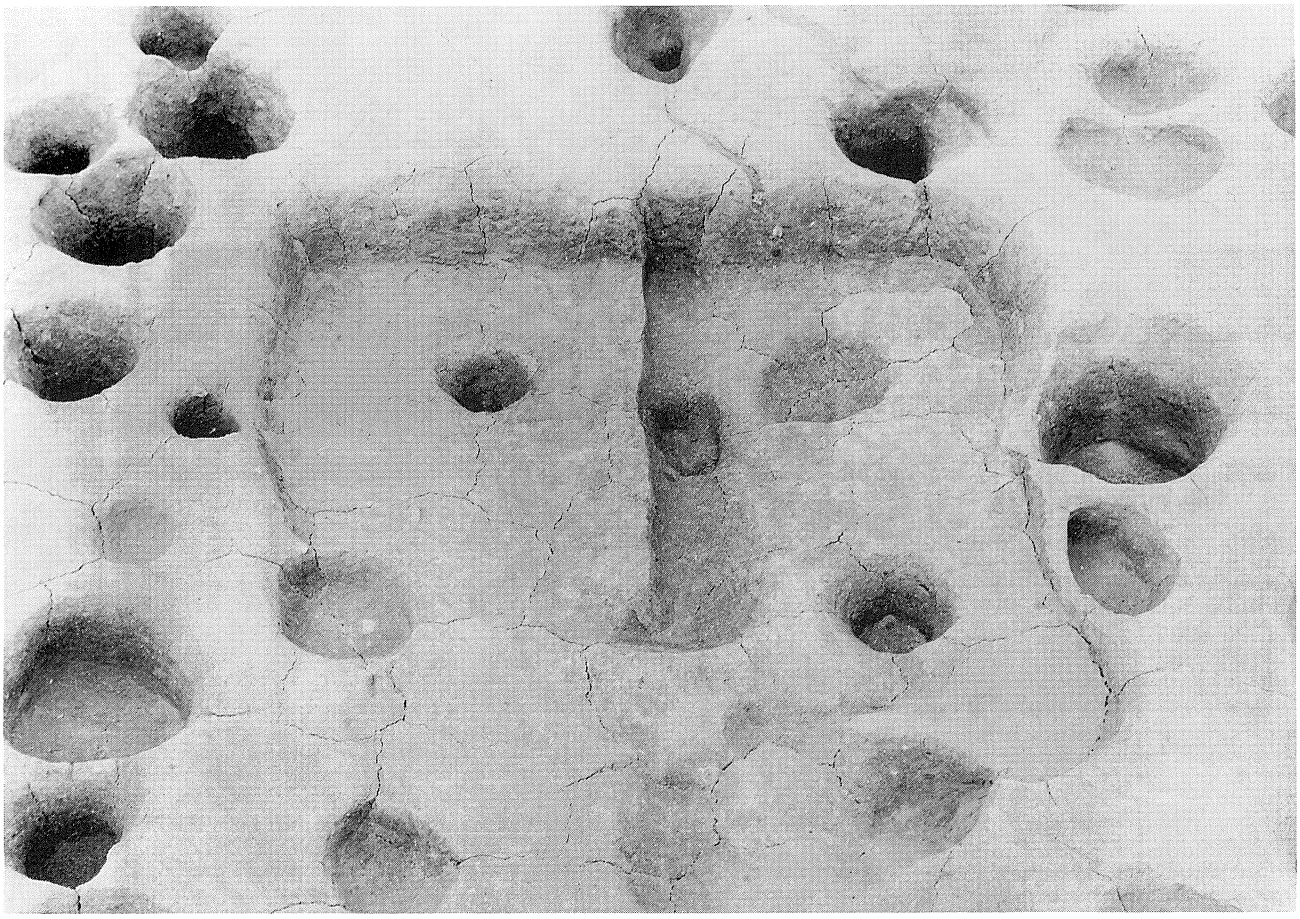
a　１号住居カマド内土器出土状況（南西から）



b　１号住居カマド燃焼部土層断面（東から）

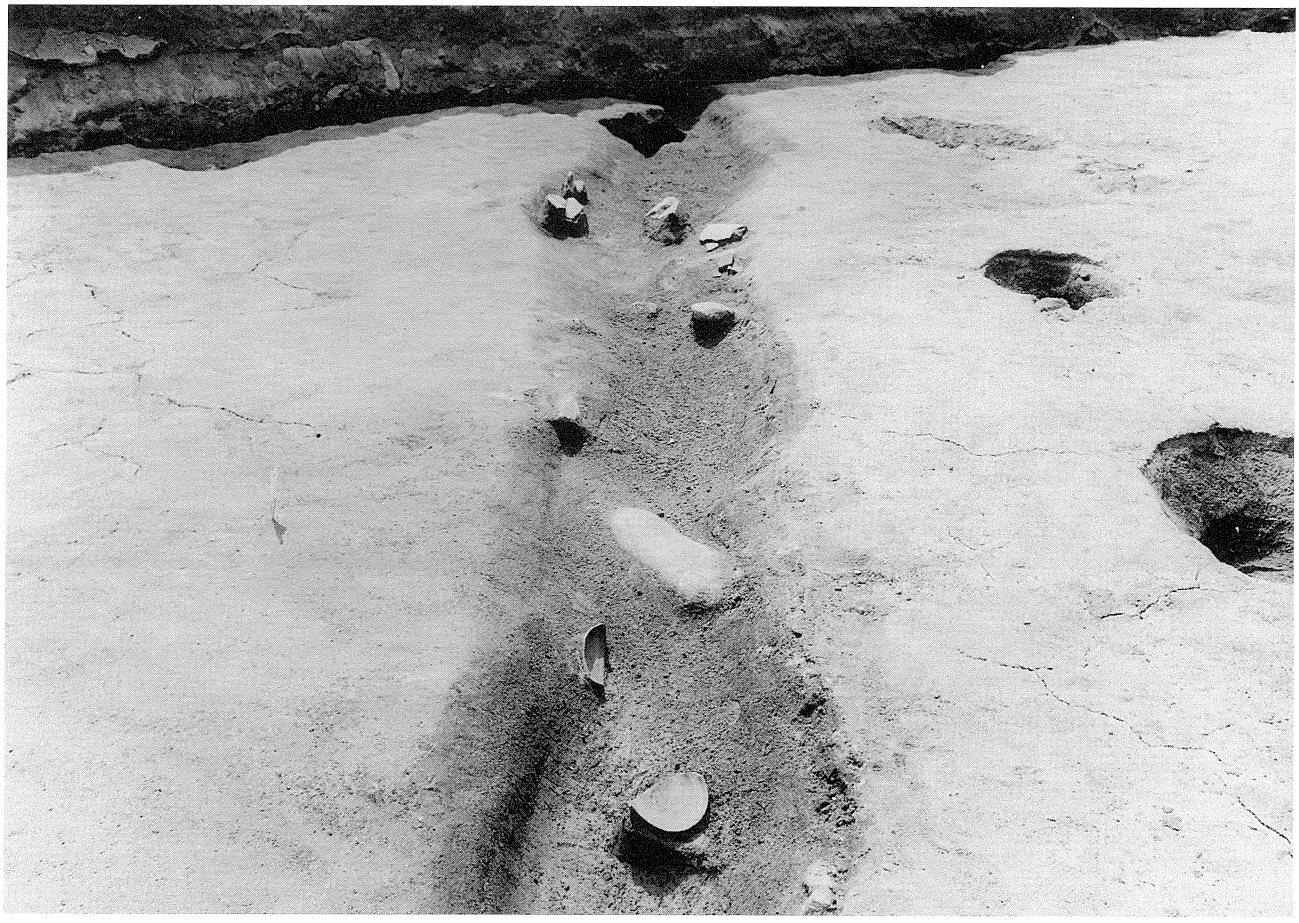
1号住居遺物出土状況

a　２号住居全景（南西から）

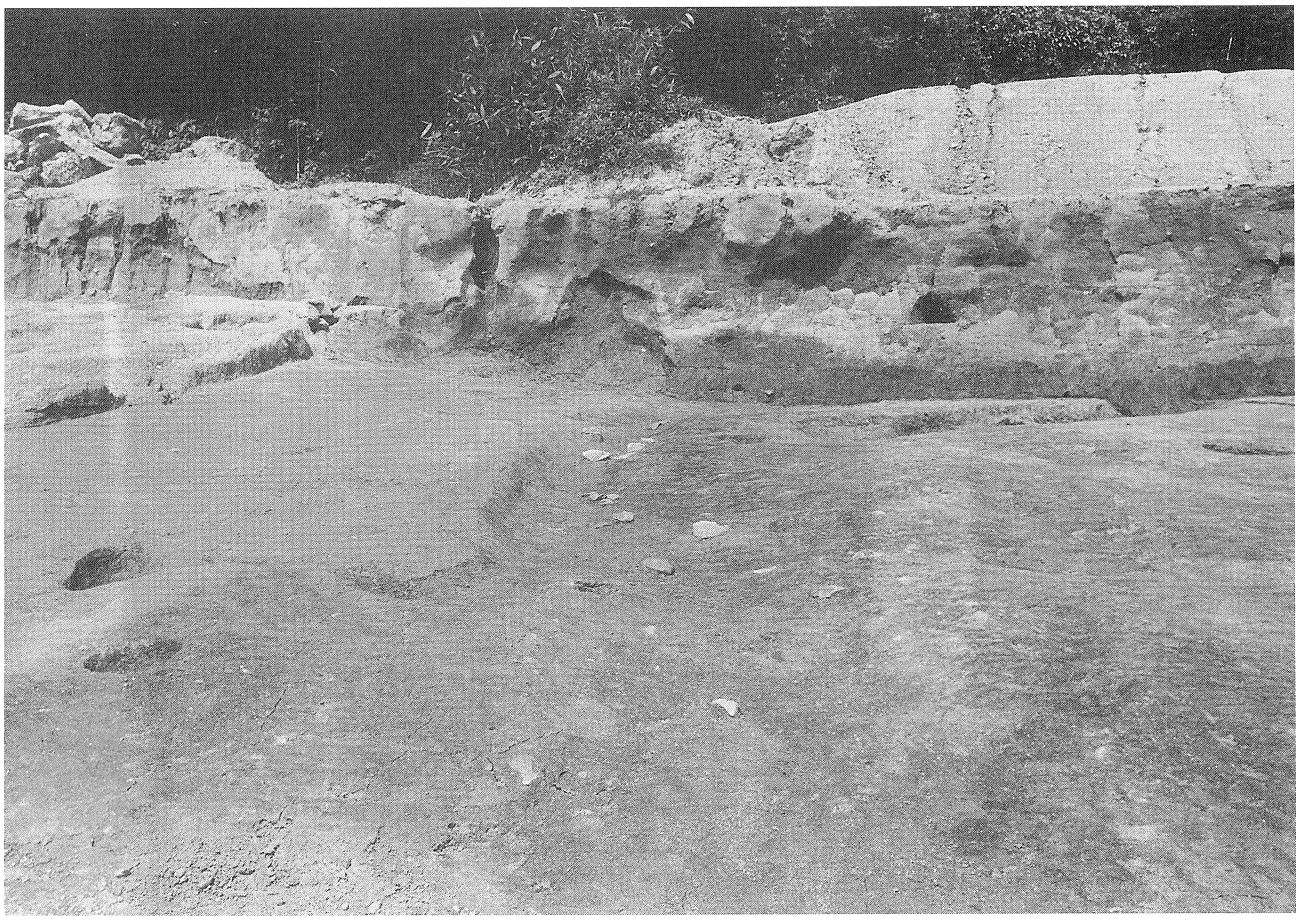


b　２号住居完堀状況（南西から）

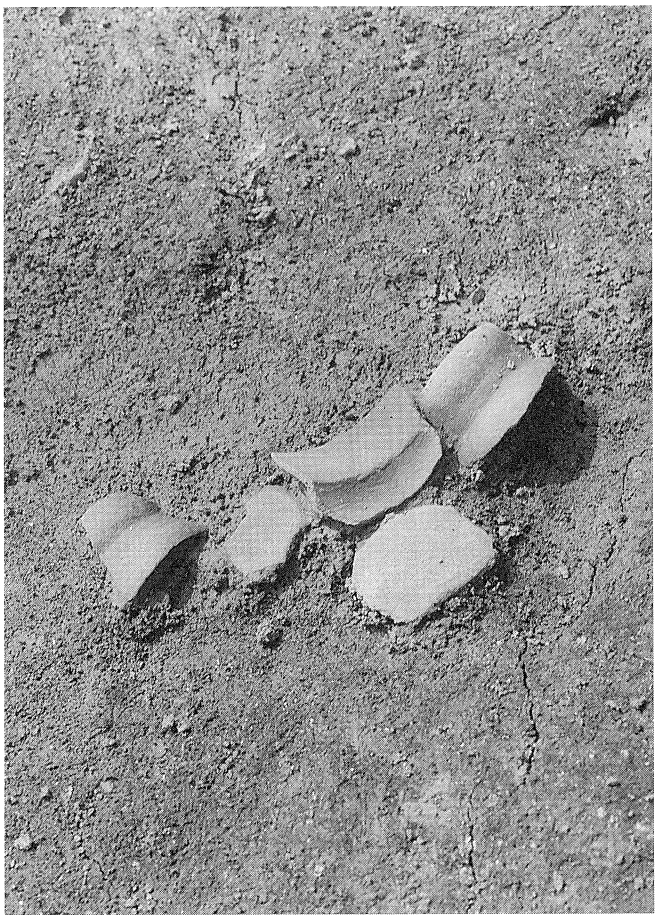
a　４号溝（南西から）



b　４号溝（南東から）



a　10号溝



b　10号溝遺物出土状況

a　８号溝（北西から）

b　８号溝土層断面（南東から）

a　9号溝

b　9号溝須恵器出土状況

２区全景（真上から）

横畠古墳検出状況（真上から）